

昭和十年三月



史蹟名勝天然紀念物調查報告書

第十輯

天然紀念物之部

福岡縣

史蹟名勝天然紀念物調查報告書

第十輯

天然紀念物之部

福岡縣史蹟名勝天然紀念物調查報告書第十輯目次

天然紀念物之部

犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲ群落	調査委員	纈	纈	理一	一郎	(一)
隱 ^{カクレ} 家 ^カ 森 ^{モリ}	調査委員	山	崎	又	雄	(三)
鎮西村の桂	調査委員	山	崎	又	雄	(五)
遠賀郡香月の大櫓	調査委員	纈	纈	理一	一郎	(三)
英彦山に於ける佛法僧(第一回報吉)	調査委員	安	部	幸	六	(五)
福岡縣に於いて注意すべき蟬	調査委員	江	崎	悌	三	(五)
船小屋の螢	調査委員	江	崎	悌	三	(六)

犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲ群落



1. 犬ヶ岳二ノ岳山頂に於けるツクシシャクナゲ群落寫眞 其一



2. 犬ヶ岳二ノ岳山頂に於けるツクシシャクナゲ群落寫眞 其二（前方に一株の見事な株を見る）



3. 犬ヶ岳笈吊に於けるツクシヤクナゲの開花状態寫眞

犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲ群落

調査委員 額 額 理 一 郎

昭和九年五月下旬、縣廳から犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲ群落を至急に調査するやう要求に接したるも、都合により自から該地に出張してその調査を實行する機會を得なかつたので、九州帝國大學植物學教室花田主計氏を煩はし、同氏に調査方針を授けて所要の調査を行つて貰ふことにした。

同氏は五月二十八九兩日に亘りて忠實なる調査を行ひ、その調査内容の報告書を余に提出せられたので、一通り目を通し、必要な程度に添削校閲し、之を同氏の名によつて報告して貰ふことにした。この報告に添附したのが即ちそれである。

本年は例年に比して犬ヶ岳ツクシシヤクナゲの開花少く、加ふるに花田氏が調査に行かれた時は、時既に開花盛期を過ぎてゐたため、開花状態或は花の變異等に就て十分なる調査を行ひ得なかつたのは、遺憾なことであつた。けれども該植物群落の状況は、同氏の調査報告によつてその大體を知るに十分であると思ふ。

茲に同氏の勞を多とし、感謝の意を表すると共に、自己の怠慢を多謝する。

尙茲に添附の寫眞三葉は、縣廳より提供せられたもので、ツクシシヤクナゲの開花状態並びにその群落状態をよく示し、花田氏の報告の缺を補ふに足るものと思はれるから、添附することにした。

調査報告

花田主計

目次

一、犬ヶ岳の位置並びに交通	三
二、犬ヶ岳の地形、地質及び氣候	四
A 地 形	四
B 地 質	五
C 氣 候	六
三、土地所有關係	七
四、植物生育相	七
五、犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲの分布状態	九
六、ツクシシヤクナゲ群落地に於けるその生育密度の調査	一四
七、ツクシシヤクナゲの植物學的記述	一八
附 追 記	一九

一、犬ヶ岳の位置並びに交通

犬ヶ岳は福岡縣の東部、大分縣の北西部兩縣界に誇り、北緯約三十三度三十分、東經約百三十一度、在り、福岡市より東方直線距離約五十六糎乃至六十糎、小倉市より南方約四十五糎の位置に在り、陸地測量部の五萬分之一、後藤寺及び中津圖郭の接續部下端に犬ヶ岳(一一三一米)を發見することゝ出来る。

交通は日豊本線宇島又は中津驛下車、宇島驛よりは乗合自動車にて大西、山内、合原を經、約一時間半にして岩屋に着。中津よりは乗合自動車にて中村、緒方を過ぎ、宇島岩屋間の山内にて乗換へ岩屋に着。岩屋より歩行約一時間半にして登山口なる吉原に達す。又中津驛より耶馬溪鐵道を利用し、津民驛にて下車し、小屋原、相原を經、毛谷村より犬ヶ岳の一ノ岳展望臺に達することを得るも、甚だしき迂回路なるのみならず、傾斜急峻にして踏破容易でない。尙貸切自動車によれば、宇島驛より岩屋を經、更に登山口の吉原まで一時間半にて達し得る。嘉穂、田川方面よりする者は飯塚、後藤寺、添田を經る乗合自動車にて、彦山町に着。同地より豊前坊、柳峠、野峠を經て前記一ノ岳展望臺に出ることが出来る。

吉原より一ノ岳への道路は、國有林行橋事業區第二十三林班内を通ずる比較的平坦なる道路で、僅かに杉造林地の一部及び恐淵等の急勾配地二、三を數ふるのみにして、歩行は比較的容易である。吉原より二時間乃至二時間半にして一ノ岳に着、乗合自動車の終點岩屋より歩行せば四時間内外にして一ノ岳展望臺に達し得られる。

二、犬ヶ岳の地形、地質及び氣候

A 地 形

犬ヶ岳とは英彦山より東走する連山中の最高峯を含む一山塊を指すところの總稱的名稱で、求菩提と甕尾との尾根の合點を一ノ岳または俗に峯宿とも稱し、現在此處に展望臺の設備あり。之より東に連なる二ノ岳、三ノ岳之を甕尾とも稱す、更に笈吊、地藏尾、宮尾等を包含するものである。三ノ岳即ち甕尾は犬ヶ岳中最高峯地（一一三一米なれども、眺望は一ノ岳（一一一七米）に比し稍

々劣る。一ノ岳は四望甚だ開け眺望絶佳、西方七八軒の地點に豪壯なる英彦山の主峯一二〇〇米が手に取る如く望まれ、北方には求菩提山(七八二米)東北は周防灘に面し、遙かに四國の連山を雲霞の中に望む。更に東方には前記甕尾の外、經讀岳(九九二米)、雁股山(八〇七米)、大平山(六三〇米)等が連峯をなして中津の平原に終つてゐるのを見る。而して東南方には鶴見、由布、南方には山國川の上流に於ける一雄峯樋桶山(八七六米)、釣鐘山(八五二米)、中摩殿畑山(九九一米)二帶大小の連山起伏重疊して山勢頗る紛糾し、遙か後方に九重山羣最高峯一八七七米の諸高峯群立し、遠望の偉大なること筆紙の及ぶところではない。

犬ヶ岳の北面には尾根を發し求心的に岩岳川に集中する幾多の溪谷ありて、何れも比較的狭い溪谷をなし、兩岸は急斜し或は崖をなしてゐる。全山鬱蒼たる森林をなして水量は豊富、溪流は各所に大小の瀑布となりて流下してゐる。尾根の兩側斜面の勾配は緩傾斜のところもあるが概して急、就中笈吊の急崖、又地藏尾及び甕尾の北側面も可なり險阻であり、下方は一部斷崖絶壁となつて居る。

吉原より一ノ岳に通ずる途中に風天窟風穴あり、嚴冬と雖積雪なく、盛夏には冷風絶ゆることがなく、昔修験道で鎮風の修法を行つてゐたところであると言はれてゐる。之より上方へ步行三四分行程にして、道路下に恐淵オソロシチの瀧がある。水量豊富、犬ヶ岳中最大瀧の稱あり、山麓の住民によつて兩乞ひの靈驗あらたかなりと信ぜられて居る。

B 地 質

犬ヶ岳及び附近の地質に關しては未だ詳細なる調査あるを知らざるも、一般に耶馬溪地帯の

地質と同一成因に言はれてゐる。即ち一帶の地は立派な舊耶馬溪熔岩より成る高原性の熔岩臺地である。合河村及び岩屋村の諸々には第三紀の終りから第四紀に亘る層理の不明瞭なる集塊岩が現はれ時としては熔岩層の下部に成層的になつてゐる集塊岩の露出が見受けられる。産下部落附近には山容耶馬溪的风景を見せ偉大なる集塊岩の山骨が點々直立し、奇巖怪石の秀峰に富んでゐる。求菩提山及び犬ヶ岳の六百米以上の高地は、殆んど前記舊耶馬溪熔岩をなす輝石安山岩の一種である。

C 氣 候

犬ヶ岳の氣候に關しても信賴するに足る資料を有せざるも、求菩提社務所の述べるところによれば極めて山岳性であつて、壹千米以上の高地にあつては、氣溫低く盛夏攝氏三十度を超えること少く、嚴冬には六百米の位置にある求菩提にて攝氏零下十五度に達したることさへある。由を聞く。冬季に於ては比較的強風であるが、山頂にて二十米を超ゆること尠なく、積雪量は全山を通じて大なりと言はるゝも、解雪は比較的早き模様である。尙氣候に關しては英彦山と大差なきものゝ如く、茲に參考までに英彦山氣象觀測所の記録の大略を標示すると、

昭和四年度に於ける記録

平均溫度	最高	十九度	七八月
	最低	零下三度	一二月
平均濕度	最大濕度	九十二%	七八月
	最小濕度	八十%	四五月

平均降雨量 最大降雨量 七百五十耗 六月

二百七十耗 七月

最小降雨量 二十五耗 十月

尙同一年の平均によれば、平地の福岡に比して平均温度攝氏五度低く、平均湿度十%高く、平均降雨量五十耗多し。

犬ヶ岳は夏季に山時雨並びに雷雨多く、朝夕雲霧を生じて大氣は可なり濕潤であり、従つて日照時間は比較的寡なきも、植物の生育には甚だ好適と稱せられて居る。

三、土地所有關係

犬ヶ岳は殆んど全部國有林地で中津營林署管轄にして、中津事業區及び行橋事業區に屬するものである。

四、植物生育相

犬ヶ岳の高地帯は全部原生林で被はれ、濶葉老樹鬱蒼として繁茂し、極めて美事、深山幽谷的林相を形成して居る。底地に在りては大部分暖地性植物生育相を呈してゐるが、七八百米以上の地に在りては、溫帯地の代表的樹木であるブナを主とするケヤキ、クマシデ、イヌシデ、アカシデ、ホノキ、ミヅナラ、シホチ、ヤマモミヂ、イタヤカヘデ、サルスベリ、グリ、アカガシ、シラカシ、トチノキ、カナクギノキ、ソヨゴ、シロダモ、アブラチヤン、ヤブニクケイ等の喬木林を上層とし、中層樹としてはツクシシヤクナゲ、ヤマツバキ、ミヤマシキミ、ヒメユヅリハ、サカキ、トベラ、ヒサカキ、リヤウブ、イヌツゲ、トネリコ、オホカメノキ、カナメモチ、シヤシヤンボ、クロバヒを以てし、樹下の草木はチゴユリ、ハ

ウチヤクサウ、タチツボスミレ、モミヂサウ、ヒロバナテンニンサウ、ヤマシヤクヤク、メタカラガウ、ヒメナルコユリ、エビネ等多數生育し、羊齒植物や蘚苔類も亦比較的豊富であり、殊に羊齒類は溪

谷に著しく繁茂して居る。

山頂尾根地帯にはクマザサ、ス、ダケ等密生し、所々に大密叢を形成して、古來修驗道者の通過した道路の外歩行困難なりし由なるが、今回の調査に際しては關係援助者の努力により、犬ヶ岳の主尾根の全行路の雜木雜草が完全に取拂はれて、歩行容易であつた。

茲に特筆すべきは、美林なるブナの老樹が前記の諸潤葉樹を混じて、甚だ廣大なる面積に亘りて群落をなしてゐること、特に笈吊の溪谷及び城井谷の奥山には、その甚だ壯觀なものがある。寫眞第一參照。この一帯の美林は、中津營林署の寶庫となつて居り、現在次第に伐採されつゝあり、ためにこの九州に於ける有數のブナ原生林が遠からず跡を斷つに至るやも知れないのは、誠に惜しむべきであると思ふ。



寫眞第一 城井谷・奥山に於ける山毛櫨の原生林

五、犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲの分布状態

ツクシシヤクナゲは九州、四國、本州中部以西に分布し、北九州に於ては、犬ヶ岳の外に英彦山、小屋岳、岳滅鬼峠、斫石峠、野峠、薬師峠、中摩殿畑、寶満、背振、矢部、星野、野河内等に自生することが知られてゐる。併しながら犬ヶ岳に産するものが最大群落をなし、甚だ美觀を呈すると云ふことは、昔から修驗道者によつて稱せられて居り、幸ひにして犬ヶ岳は往古俗人の入山少なかりしたためよく保存せられ、一般に知らるゝに至つたのは極く最近のことである。

犬ヶ岳のツクシシヤクナゲは六百米以上、主尾根に至るまで、何れの尾根といひ谷といひ量的には差異あれども、殆んど之を見ざるところがない。ツクシシヤクナゲ群落は殆んど全部上層をなす喬木の下に陰樹的に旺盛に發育を示し、地表は枯葉、枯枝等堆積腐植し、次第に腐植土となつてゐて、此の腐植土の多い土地には良く該樹が繁茂するものゝ如くである。これに反し、此の地の日あたり

犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲ群落



寫眞第二 第一表中 第三號樹 幹の狀況 (川上氏撮影)

良きところや地表土淺きところに發育するものは、樹勢概して短倭である。

特にツクシシヤクナゲの密生する場所は壹千米以上の地點にあり(寫眞第三A參照)クマザサの密叢地及び濕地にては比較的少く、ブナ又は他の上層樹林の鬱閉する場所に多數發生し、幹周四十糎乃至六十糎大なるは約七十糎に至る老巨樹を所々にて容易に發見することが出来る。老巨樹の幹には多く蘚類並びに地衣を生じ、地上へ横出又は斜出する幹の下部の幹形は、概して下に長さ楕圓形又は長卵圓形をなしてゐる。

今次に主尾根通過の際數個の代表的な株につき測定した數字を示すと、次表の通りである。

第一表 ツクシシヤクナゲの代表的數株に於ける測定結果

株の番號	幹周	樹高	最長枝張	平均半徑	樹冠面積
No. 1	64 cm	6.25 m	6.8 m	3.2 m	32.17 m ²
" 2	62	5.50	6.1	3.1	30.19
" 3	64	6.18	—	—	—
" 4	87	5.00	6.6	2.85	25.52
" 5	65	6.33	6.44	3.22	32.57

ツクシシヤクナゲの枝張りは樹幹を中心に放射的に枝を發出するものは殆んどなく、大部分一方に偏在する。表の枝張りは最長直徑を以つて示してある。樹冠面積の表示法は枝張り最長直徑及び最短直徑を測定し、その各々の二分一の和を更に二分して之を平均半徑と見做し、この數字を基礎として面積を表はしたるものである。(表中の第三號樹の狀況、寫眞第二參照)



A



C



B



D

寫眞第三： A 壹千米以上の地に於けるツクシヤクナゲ群落の一部
B 岩上に生育するツクシヤクナゲの稚樹

C ツクシヤクナゲの上に枯枝の堆積せる状態
D ツクシヤクナゲの樹皮

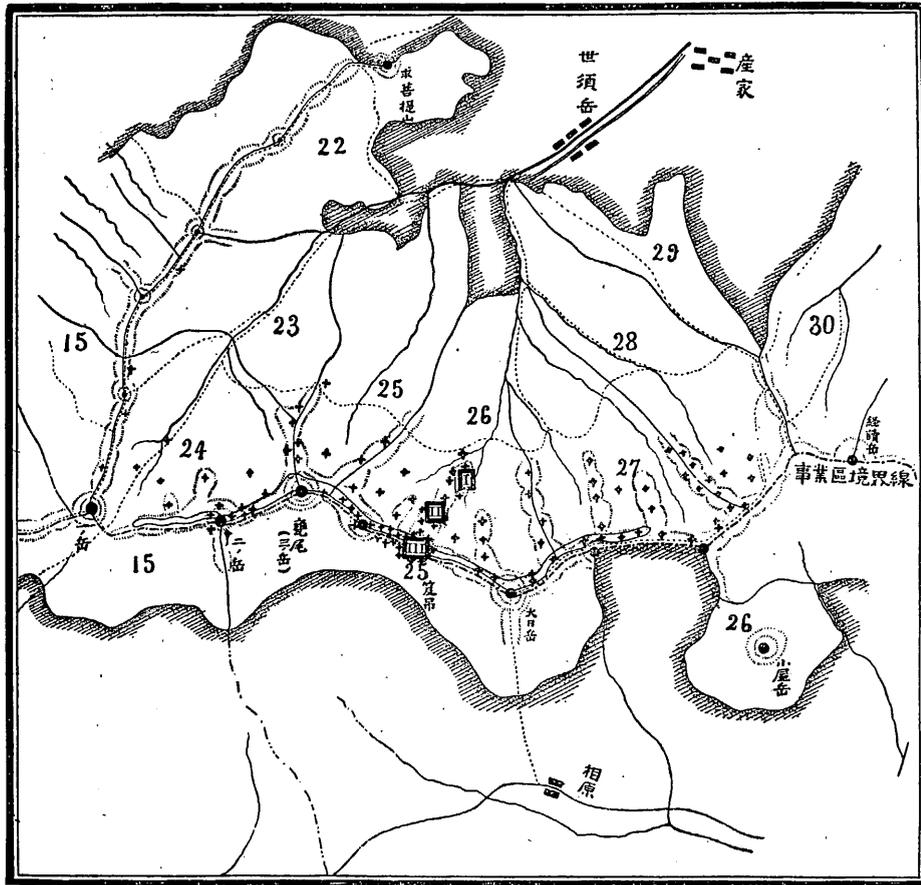
犬ヶ岳主尾根の北面が急崖をなし、南面が緩傾斜をなす場合には、南面の地に多數生育すれども、兩側面が緩漫なるときには、比較的北面の地に多く之を見る。斜面の緩なるか急なるかはツクシシヤクナゲの増殖の難易に關係あるものらしく、主として緩傾斜地に多くそれを見る。一般に犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲは群生的に生育し、大小の群落が連續的に並列して、路程凡そ二軒餘にも及び、その群落の諸々に散在する老樹は、或は傘狀或は圓壘狀に他と密接し實に壯觀である。而して犬ヶ岳中最大群落形成地と思はれるところは、笈吊より約五十米西に當る尾根地帯である。

ツクシシヤクナゲの生長は頗る緩漫なるもの、如く繁殖の方法としては實生及び分生繁殖で、こゝでは前者による多くの稚苗の散在するのを見るのが普通であり、屢々自然の枝梢が地上に垂枝となり、そのまゝ根を生じ、所謂壓木繁殖トリキをなすものあり、又蟠屈する枝が他の樹木の枯枝並びに枯木の倒壞によつて壓倒され枝は土着の部分より根を生じ、恰も實生の如く分立株となつてゐるもの等あり、斯く他力的に自然壓木により増殖するもの、其の數甚だ大なるものがある。ツクシシヤクナゲの巨木が主として壹千米以上の地にありて、それ以下の地に存するもの、比較的小木なる理由は、現場の示すところより考ふるに、壹千米以下には雜樹繁茂し、射入光線の不足及び水濕過多のために、その良好なる發育を妨げるのによるであらう。五六百米の地點に於て僅かに發見し得た群落は、岩上（寫眞第三B参照）にのみ生じて、恰かも水濕の地を避けてゐるかの感があつた。

尙犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲの分布状態を簡單に概念するために、その略圖を掲げる

犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲの分布圖

圖中番號は中津營林署の林班番號



- 上: 行橋事業区
- 下: 中津事業区
- 山岳の尾根を示す
- 主要山頂
- + ツクシシヤクナゲの自生地
- ▨ 國有林と公有又は私有地との境界

こととする。(ツクシシヤクナゲの分布圖参照)

六、ツクシシヤクナゲ群落地に於けるその生育密度の調査

密度の調査は時間の都合上僅かに三ヶ所に於て、十米平方の面積内に出現せる株の数を調査したのみであつた。但し調査地の選定に注意を拂ひ、笈吊より北に走る尾根に沿つた地に於て、密中、疎の三個所を選んで調査することとした。

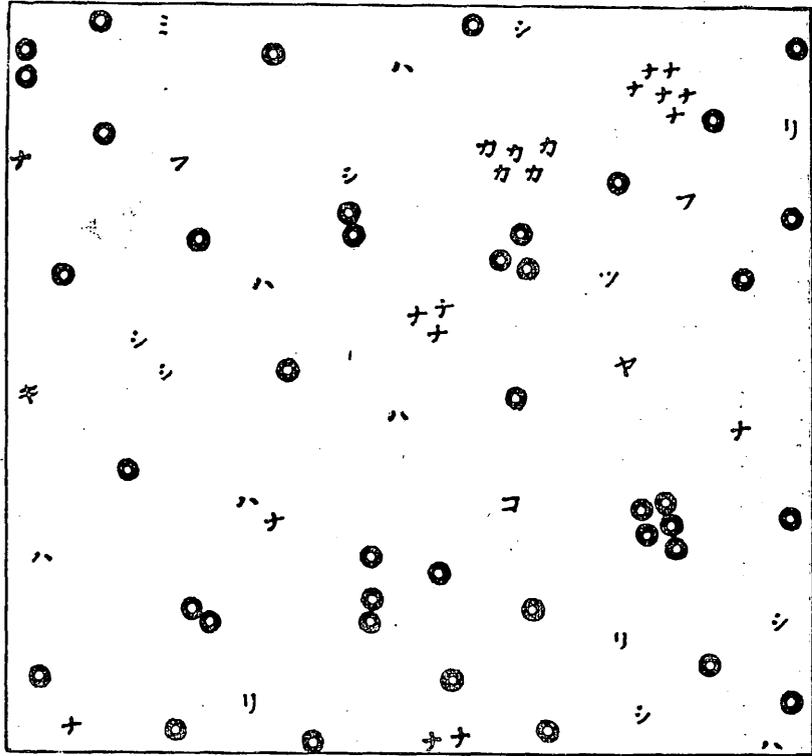
第一號 調査地 (分布圖内I参照)

笈吊より東北面に突出する支尾根、二十六林班の上部に位置する高度ほゞ八百米の原生林に於てツクシシヤクナゲの先づ中庸度の生育地と思はれる部分を選び測定した。比較的緩漫な傾斜地(十五度)で、其の地表の面積十米平方内に於けるツクシシヤクナゲの立木及び他の樹種の本数をも計上したものである。此の地の上層喬木の枝による被覆度は可なり高く、樹下は半陽性樹木の生育地としては好適地と思はれた。上層樹種は主としてブナ、ヤマモミヂ、ナ、ミノキ、ツガ、アカガシ等で、中層樹種はツクシシヤクナゲ、ハヒノキ、コブシ、シキミ、ミヅナラ、リヤウブ、フシノキ等であり、地表面には枯葉、枯枝等堆積し、下部は次第に腐植し、深土は黒褐色の腐植土である。ツクシシヤクナゲは其處此處散在し、下部は蟠屈したる枝を横出し、直立又は斜行し、雑然として他の樹木と混生してゐるが、樹皮によつて直ちに之を識別することが出来る。本調査區劃内にはツクシシヤクナゲの幹周三十糎、樹高四米以上のものは少ない。(分布密度圖 第一参照)

第二號 調査地 (分布圖内II参照)

同じく二十六林班、笈吊より東北へ突出する支尾根の第一號調査地より南方へ約二百米上位

ツクシシヤクナゲの分布密度圖 第一 (第I調査地十米平方)



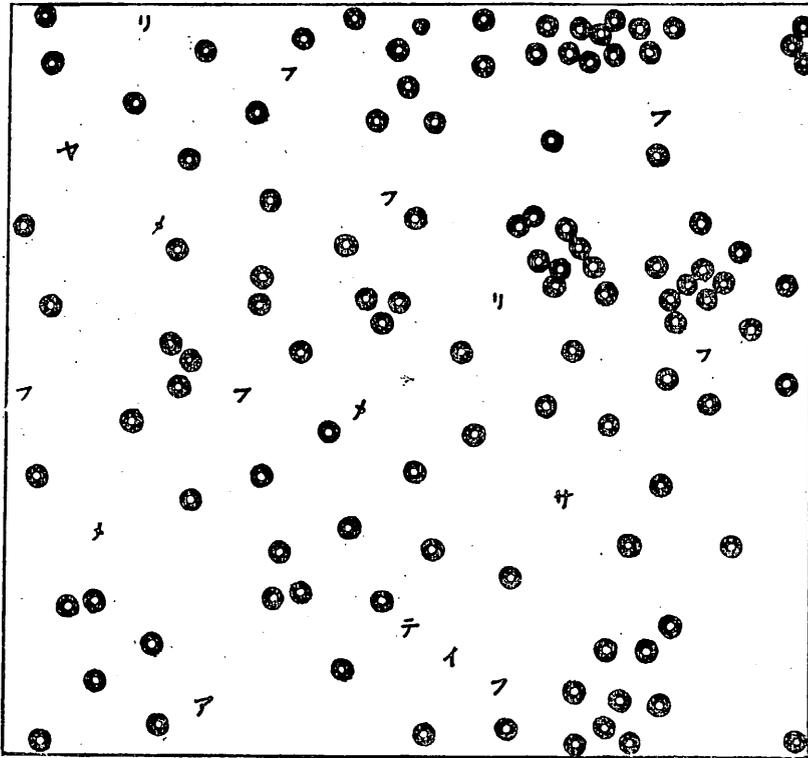
記號	樹種名	本數
○	ツクシシヤクナゲ	四一
①	ナ	一五
②	ハ	一
③	カ	六
④	フ	二
⑤	ツ	一
⑥	ヤ	一
⑦	コ	一
⑧	リ	一
⑨	シ	一
⑩	ギ	一
⑪	ミ	一
⑫	ナ	一
⑬	ナ	一
⑭	ナ	一
⑮	ナ	一
⑯	ナ	一
⑰	ナ	一
⑱	ナ	一
⑲	ナ	一
㉑	ナ	一
㉒	ナ	一
㉓	ナ	一
㉔	ナ	一
㉕	ナ	一
㉖	ナ	一
㉗	ナ	一
㉘	ナ	一
㉙	ナ	一
㉚	ナ	一
㉛	ナ	一
㉜	ナ	一
㉝	ナ	一
㉞	ナ	一
㉟	ナ	一
㊱	ナ	一
㊲	ナ	一
㊳	ナ	一
㊴	ナ	一
㊵	ナ	一
㊶	ナ	一
㊷	ナ	一
㊸	ナ	一
㊹	ナ	一
㊺	ナ	一
㊻	ナ	一
㊼	ナ	一
㊽	ナ	一
㊾	ナ	一
㊿	ナ	一

の地點、東北に面した三十二度の急傾斜地で、高度九百米、ツクシシヤクナゲの自生比較的小數地と思はれところを選び、前と同一方法によりて調査した。樹相、土地等の環境は第一調査地と大體同じく、樹種及び傾斜度を異にするのみであつた。分布密度狀況は分布密度圖第二参照の事。

犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲ群落

ころを選定し、第一號調査地と同一方法により調査した。第一號調査地に比すれば被覆度稍々高く、上層喬木としては幹周二米以上のもの數本ありて、中層並びに下層樹木を覆ふてゐた。地表面は腐朽しつゝある大なる古木が横臥して峯通りの道路を塞ぎ、或はツクシシヤクナゲの枝梢を

ツクシシヤクナゲ分布密度圖 第三 (第Ⅲ調査地十米平方)



記號	樹種名	本數
○	ツクシシヤクナゲ	108
⑦	ブ	七
④	ヤマモミヂ	一
①	イヌツゲ	一
⑤	サハフタギ	一
⑩	リヤウブ	二
⑦	アブラチャン	一
②	クロウメモドキ	三
⑧	ヤブデマリ	一

犬ヶ岳に於けるツクシシヤクナゲ群落

壓倒し、又多數の枯枝等落積して、ツクシシヤクナゲの破損著しきものがあつた。(寫眞第三C参照)

此の地に生育してゐるツクシシヤクナゲは、多くは割合に小樹にて、何れも幹周五十糎に充たざるものであり、又樹高四米を超過するものは少ない。(分布密度圖第三参照)

ツクシシヤクナゲの繁殖の方法は前記の如く、實生及び壓木的にして、無數の稚苗を發生増加し、之等の小なるものを調査本數に加算するときは、第三調査地にては百八十株以上となる。

七、ツクシシヤクナゲの植物學的記述

ツクシシヤクナゲは日本特有の植物と稱せられ、本邦に於けるシヤクナゲ中最も大形にして且美花を開き、中井博士は「ヒマラヤ」山産のシヤクナゲに比敵し得る美花を着けるは本種のみと推賞されて居る程で、其の分布は北限地帯信濃、飛驒より越前、滋賀、伊賀、大和、伊勢以西、四國、九州に及び深山に生ずる常緑中灌木で、生長緩漫幹は往々地上に蟠屈して、樹皮は灰褐色である。初めは樹皮の表面平滑であるが、生長するに従ひ小鱗片に淺裂する。(寫眞第三D参照)

葉は有柄、柄長二乃至三糎にして、長橢圓形又は倒披針形、兩端は鈍圓形、全縁で厚く、上面は深綠色にして革質滑澤である。下面は帶褐色の毛茸を密生し、枝の先端に互生簇出する。葉片の長さは十乃至十五糎、巾三乃至四糎にして、主脈は表面に著しく現はれて太く、裏面には隆起してゐる。側脈は下面にては殆んど全く認め難く、僅かに上面に於て細き凹入線を示す。幼葉の表面は褐色の細毛を有し、裏面は白色の密毛ありて、その上を淡褐色毛にて被ふ。

花 初冬より蕾を生じ花期は五月中旬、犬ヶ岳、蕾の咲き初め状態の期間甚だ長く、普通一週間餘り、その後二日にして完全に開花し、凡五日間開花を持続する。枝の先端に淡紅色の頗る艶麗な

る美花を著け、咲き初めの時期は紅色なるも、盛花期に至らば淡紅白色に變ずるもの多く、花序は繖房狀をなし、花數は一定せざるも九乃至十五個を簇生する。花梗は二乃至四糎、褐色の毛を生じ、基部には粘着性の苞あり、苞は下方のものは稍々卵形尖頭なるも、上方のものは長鈍頭にして、外部には多くの細毛を有す。花冠は漏斗形にして直徑四乃至六糎、各個花は七裂即ち七花瓣を有し、各裂片は形不同にして球形又は卵圓形、上位の一裂片は紅紫色の小斑點九十乃至百二十個を有する。雄蕊は十四個、花絲は花冠より短く、葯は黄色にして二室、上端に葯孔あり、葯孔は幼き時は薄膜あるも、花粉成熟と共に破れ、花粉を放出する。葯は背面中央部を以つて花絲に著き、花絲の長さは一五乃至二五糎である。雌蕊は柱頭の先端が平たく、雄蕊より長く抽出し、長さ二五乃至三五糎あり、子房は幼きは有毛、後蒴果となり、七室にして毎室に多數の胚珠を藏して居る。

果實 蒴果は圓柱狀又は長橢圓形、表面には七列の淺き溝を有し、長さ二乃至三糎、巾〇三乃至〇五糎あり、短い絨毛で被はれて居る。十一月頃暗灰褐色に熟し、胞背に於て裂開し、各室の種子は微小にして多數あり、細長にして稍々曲る。

材 材質は堅硬にして緻密、淡黄色を帯びて、年輪は鮮明でない用途としては箸、定木、印材及び裝飾材として用ひられる。

追記

犬ヶ岳には又白花を著ける石南ありと稱せられて居るも、調査の當時は之を見ることが出

來なかつた。又今年はツクシシヤクナゲの開花一般に少く、調査當日は稍々花期に後れたため、之に就きても十分な調査をなし得なかつた事は甚だ遺憾であつたが、北部九州にて犬ヶ岳に於けるが如く、ツクシシヤクナゲの偉大な巨木であり又老木より成る群落を他に見出す事は稀有であらう。それは犬ヶ岳が特に僻地であるが故に世人の注意を惹く事の尠なかりしことによると思はれる。犬ヶ岳の全山を學術上の必要より保護し保存せしむる事は、營林署の施業上多少支障を來すであらうが、幸ひ該樹の群落の主要部は山頂尾根地帯に在り、此の部の現状保護はさまで困難ではないと思はれる。今や該地の道路大いに開鑿せられ、犬ヶ岳に於ける該樹は近年次第に行者、登山者並びに園藝家等の注意を喚起し、心なき者等の採掘の數を増さんとするは誠に遺憾に堪へぬ。今にして適當の對策を講ぜられねば、かゝる發育緩慢なる樹種は如何に此の地に自生群落廣大なりと雖、漸次滅亡することは必然である。又該樹は元來岩上に多く發生するとせらるれども、犬ヶ岳に於ては土壤地帯に半陽樹木として旺盛に繁茂せる故に上層樹木を伐採せる時は日射過度となり、加ふるに風害等に枝條は忽ち折傷を生じ、現在に於けるが如き繁茂は、次第に退勢を招く事も明かである。故に該樹木の現状を維持するには、必ず上層喬木を其儘併存せしむ必要があるであらう。

本報告は、瀨瀨教授の指圖に従ひ、昭和九年五月廿八九の兩日に亘りて行ひたる調査内容の記録である。調査をなすにあたり終始非常なる盡力を與へられた八屋町今吉氏並びに中津營林署長竹之内氏及び兩日案内の勞をとられた福岡日日新聞社通信員大江氏、岩屋村長鹽田氏、求菩提社務所廣澤氏等の諸氏に對し滿腔の謝意を表す。(一九三四、六、二四)

隠カクレ

家ガノ

森モリ

東南より見たる隠家森

最大幅の樹幹

川上市太郎氏撮影

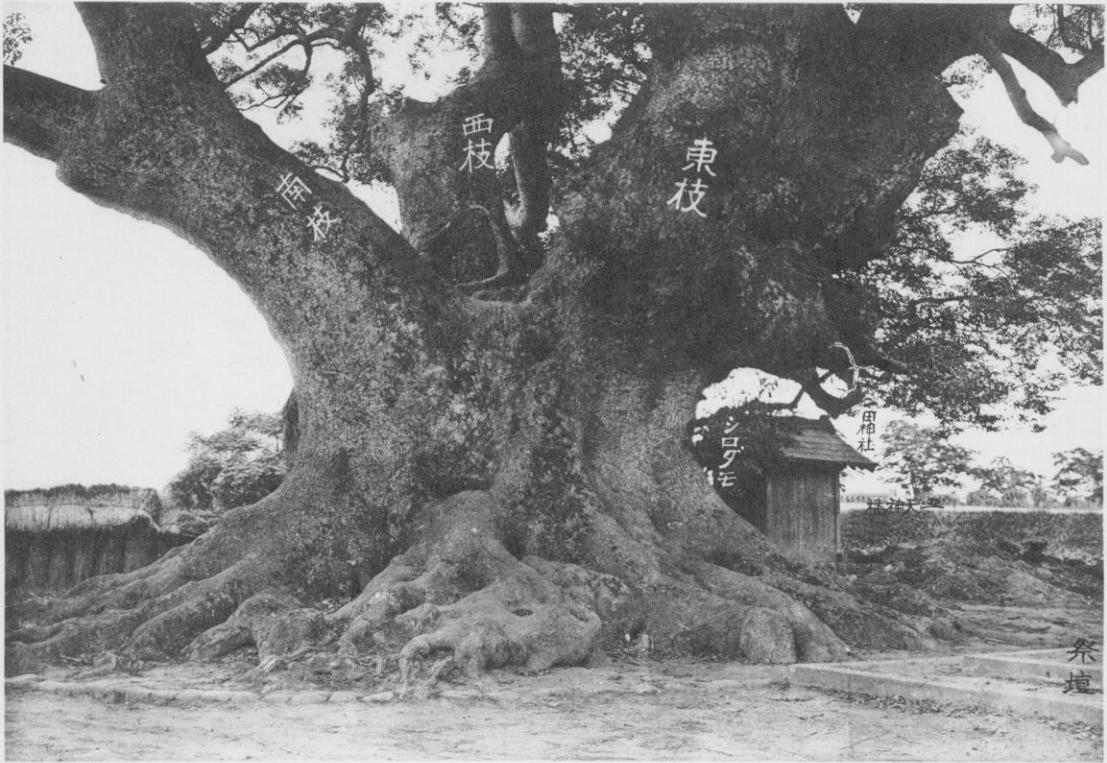


南方より見たる隠家森

A 洞穴 B ムクソ木 C 煙草乾燥倉庫
D 蕙蘇宿青年公會堂 E 田神社

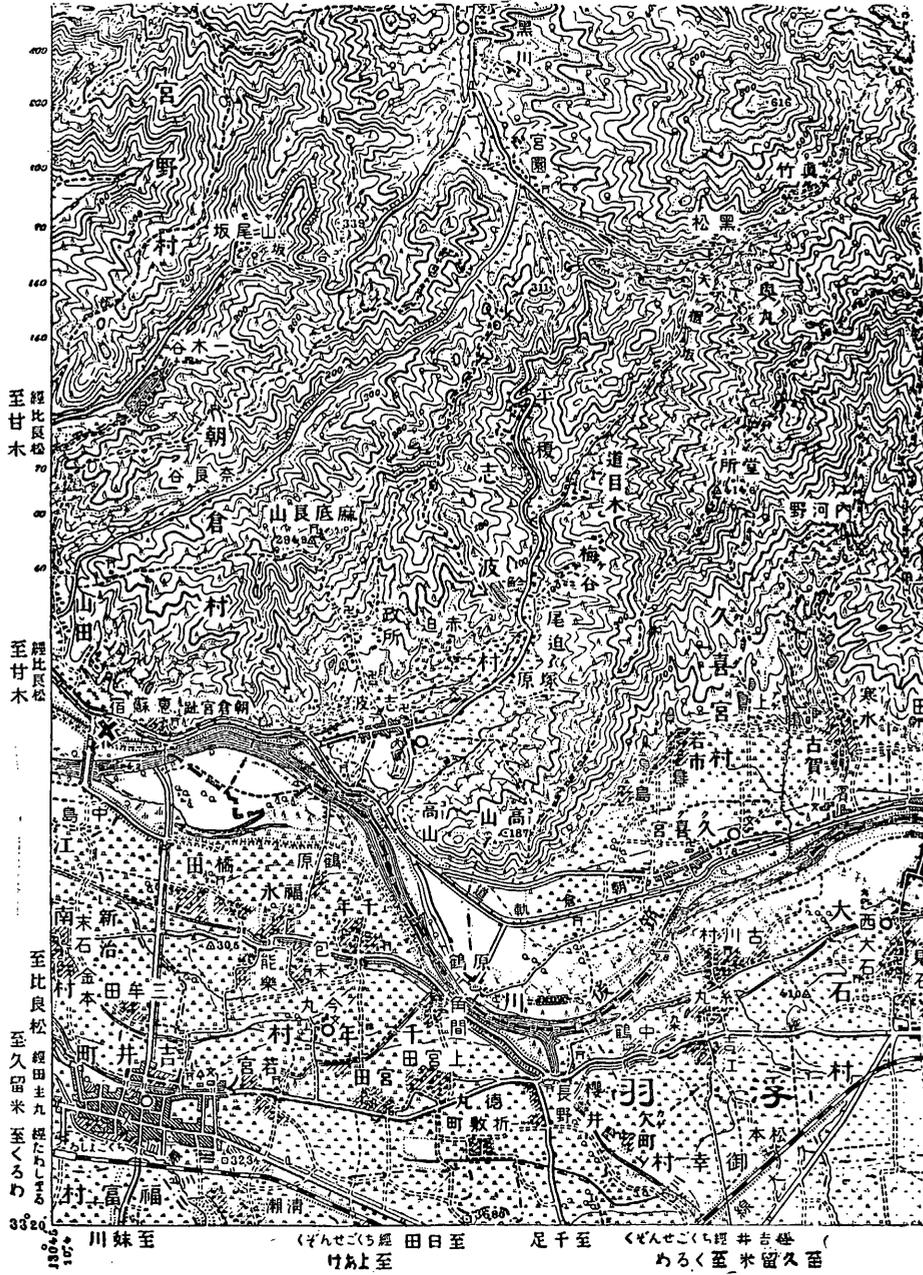
川上市太郎氏撮影



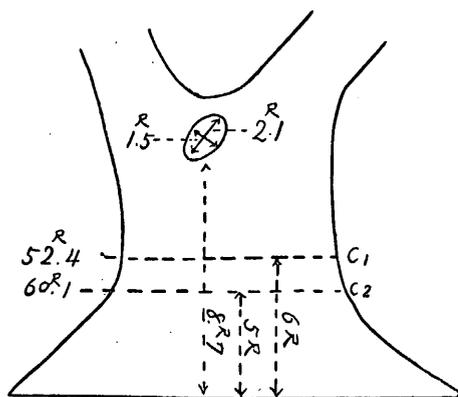


圖形地一ノ分萬五

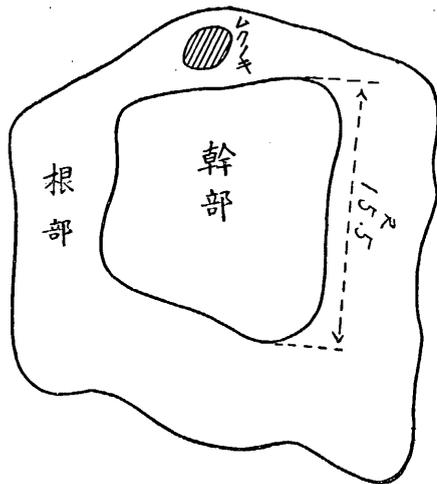
井 吉



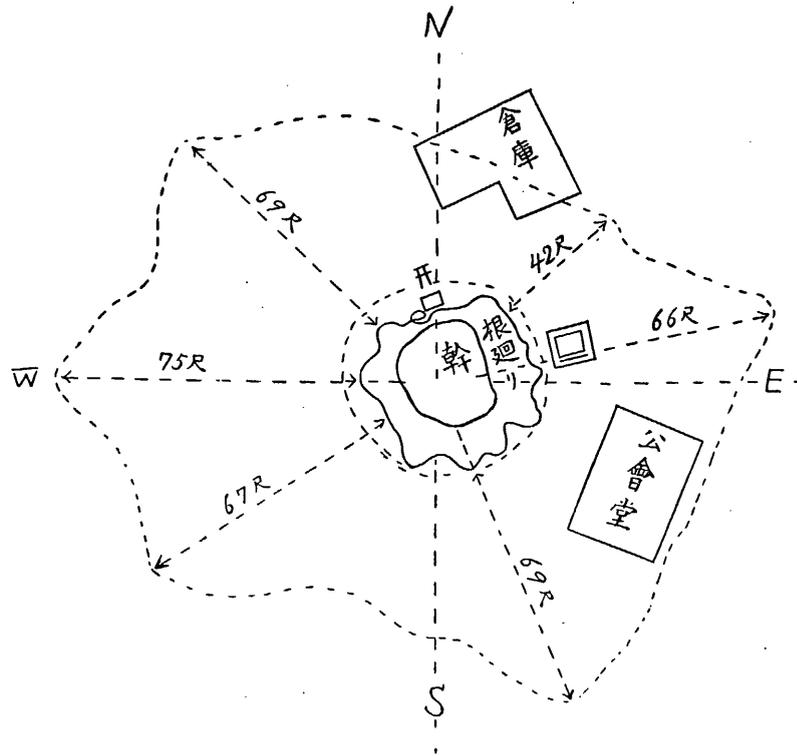
昭和九年五月二十日
 三好博士指導川上噫託村役場員測定見取圖
 樹幹及洞穴ノ大サ



昭和九年五月二十日
 三好博士指導川上噫託村役場員測定
 樹幹ノ最大幅見取圖



隱家森
 枝張り想像圖



カクレ
隠

ガノ
家

モリ
森

調査委員 山崎 又雄

名稱 隱家森

所在地 福岡縣朝倉郡朝倉村大字山田字丑天神

所有者 福岡縣朝倉郡朝倉村大字山田 江上定美外九名

樹種 樟

樹幹の大きさ 根廻り 百十七尺三寸

地上五尺の廻り 六十尺一寸

地上六尺の廻り(根莖の境界) 五十二尺四寸

最大幅(東部) 十五尺五寸

樹高 九十六尺

枝張り 東へ擴り 六十六尺

西へ擴り 七十五尺

西南へ擴り 六十七尺

隱家森

北へ擴り

六十九尺

南へ擴り

六十九尺

東北へ擴り

四十二尺

樹

齡

約千五百年以上(千八百年とせるもあり)

樹相及樹勢

根部高く地上六尺の所まで達し地上九尺の所より東、北、西の三大枝を出し其の枝間廣く平坦にして北枝は直に二分し其の北方の分枝は又直に分岐して恰も五大枝が平等に四方に分出したるの觀あり、南東の枝は下に一枝枯れたる跡あり、二分して一は高く、一は低く垂れて惠蘇宿青年公會堂の屋根上を覆ひ、西の枝は一丈位にて大なる枝の折れ口あり、それより西南に傾き又分れて二枝は上に、一枝は下に垂れ西方へ延ぶ其の距離根元より七十五尺あり、東方に出たる枝は最も大きく分岐點より上方は猶大きくして二又に分れ、北の枝は又二分をなし煙草乾燥倉庫の上を覆ふ、樹枝いづれも勢よく損傷少なく枝四方に擴り樹景美觀を呈す、幹部頗る雄大なり、唯南方樹幹の地上八尺の所に洞穴あり其の長さ長徑二尺一寸、短徑一尺五寸の楕圓形にて其縁邊は樹皮内側へ卷込みて内部枯死し三尺位の横穴となりそれより孔は垂直となり廣濶なる空洞となる、子供等はこの横穴より這ひ込み洞内に飛入る、内部は測ることを得ざりしも話に依れば二三十人位は優に容れるといふ。

五大枝の分出せる中間の平坦なる部も北方に枯れたる部あり、北西部樹幹に添ひ樟の根に包圍されてムクノキの大木あり、地上五尺にて周り十尺五寸あり、樟の幹に壓迫されて成長し

たる故に扁平となれり、その第一の枝は北方に水平に蜿蜒と延び本幹は直立し樟の間に成長し居れり、その傍にシロダモの一株あり、其處に田神社を祀る所謂丑天神なる由にてこの地を丑天神といふ。

傳 説

紀元千三百二十年齊明天皇の六年、百濟國新羅のために破られ救を我國に請ふ、翌年天皇は筑紫に御下向朝倉の橘廣庭の行宮に在らせ給ふ時に、非常を警戒する爲めに北に荊萱の關、南に朝倉の關を設け往來の人は必ず名乗して通過せしむ、其名乗し能はざるものはこの關を通さざりし故に、それ等の人々は朝倉の關に近き丑天神の森に隠れて、夜間竊に他の途を通りしものか、それ故に此森を隱家森と呼ぶ、其の頃は森林なりしも次第に伐裁開墾されて今は其頃より大木なりし樟の一株残り隱家森と稱し丑天神を祀る、今は田神社といふ小祠あり、朝倉の關跡はこの森より一町ばかり東に當り惠蘇宿にあり、又名乗りの關とも云ふ。

名乗して夜深く過きぬ郭公我をゆるさぬ朝倉の關

小 從 役

關跡に接して惠蘇八幡宮あり、この山の上に齊明天皇の御殞斂地あり、中大兄王子は黒木の削らざる丸木の御殿を造り喪に籠らせ給ひし木の丸殿の跡なり。

朝倉や木の丸殿に我居れば名乗をしつゝ行くは誰が子ぞ

天 智 天 皇

木の丸御殿の直下に朝倉の關ありて、姓名を問はれ名乗し能はざる者は其近くの森の中に隠れ居たりといふ傳説は、今日の地形にも適し其頃より隱家森の樟の大樹がありたりとすれば、齊明天皇御崩御の年は今より千二百七十四年前なり、故に此樟が約千五六百年以上の樹齡

なることを推測することを得。

文 献

一、天然紀念物指定

昭和九年十二月二十八日 文部省告示第三百十二號

隱家森

所在地 福岡縣朝倉郡朝倉村大字山田字丑天神

指定地積 民有十筆内實測一段五畝十步

說明 一株ノ樟ニシテ目通幹圍約十八米上部ヨリ五大枝ヲ分出シ枝條四方ニ擴

ル樟ノ巨木トシテ有數ノモノナリ。

保存ノ要件 公益上必要已ムヲ得ザル場合ノ外枝葉ノ伐栽其他樹木ヲ毀損スル虞アル

行爲ハ之ヲ許可セザルコトヲ要ス。

二、朝倉郡朝倉村天然紀念物指定申請書

三、福岡縣名勝天然紀念人物誌

四、福岡縣鄉土讀本

五、筑前續風土記

終りに川上市太郎氏の御指導と朝倉村惠蘇宿に居住せらるる稻榊徳次郎氏に敬を受けたることを感謝す。

鎮
西
村
の
桂

新 緑 に 萌 ぶ ゆ り 桂 樹



嘉穂郡鎮西村桂の雄花

昭和九年四月十三日寫生



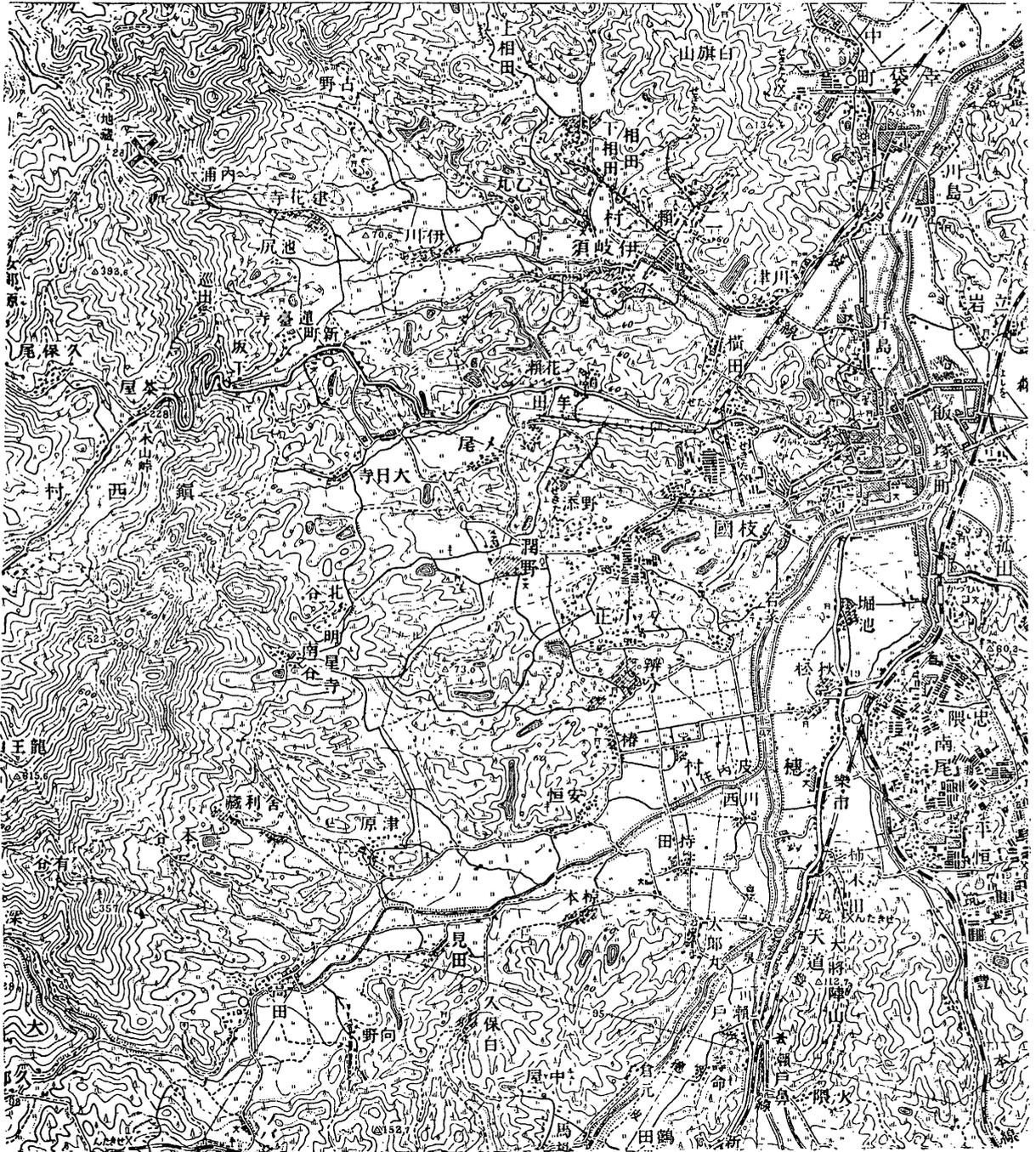
太宰府

五萬分一地形圖

亦間

至福丸

ノ至こたけ



鎮西村の桂

調査委員 山崎又雄

所在地 福岡縣嘉穂郡鎮西村大字建花寺字舞山
樹木及土地の所有者

福岡縣嘉穂郡鎮西村大字建花寺參百六拾九番地

關幾次郎外八十五名

樹種 桂(かつら)

樹齡 約千年

樹幹の大きさ 地上五尺の廻り 三十九尺

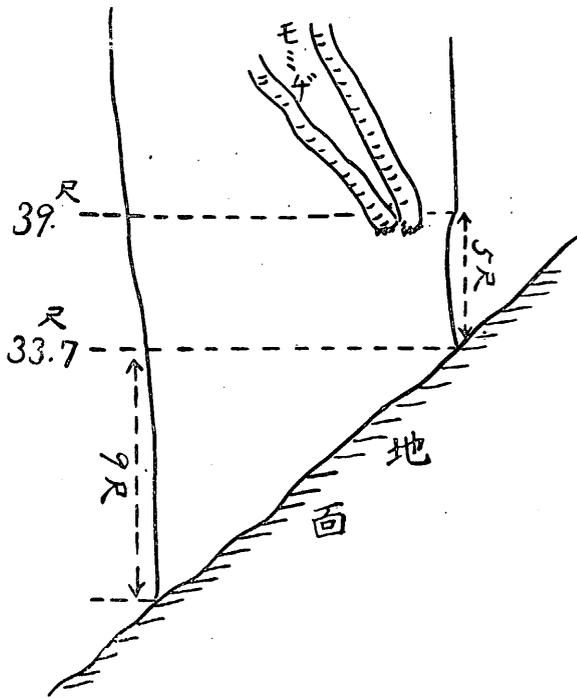
高地面の廻り 三十三尺七寸

樹高 約九十尺

枝張り 約九十尺

主なる枝 拾五條

三好博士土指導上川囁村役場測量員見取圖



樹相及樹勢

前記の如き樹幹の大きにて直立し、周縁に枝條分出し主なる枝十五條を數へ、大枝は直生し小枝は纖弱にて下垂す、南方の枝は傾き北方に枝少なくて直立す、幹部は根元より却て上部は大きく圓錐形に繁茂し、その東北隅地上五尺の所に二本のモミヂを傍生し、一は周圍三尺一寸一は二尺三寸あり、この樹に着生する植物はキヅタ、テイカカヅラ、サネカヅラ、ノキシノブ、マメヅタ等なり、就中キヅタは南方の枝に多く着生繁茂せり、この桂の生ずる桂谷は西方八木山の方より流れ來る溪流にてV字谷の側に生じ、其斜面には元樹木鬱蒼と茂り居りしを伐裁し、今は唯この桂の木が神木なりし故に斧鉞を免れて周圍には吉野櫻を植えて公園となせり、樹下にはヤブラン、リウノヒゲ、ヤブソテツ、クリハラン、ウバユリ等陰地の雜草あり、谷の南側には杉竹の植林あり、谷間にはオホミツデ、ヒロハノヤブソテツ等あり。

この地古は桂の多かりし由なるも悉く伐り取られたりしといふ。

古來この樹には種子を生ぜずといふ、昭和九年四月十日雄花を着けたる枝を觀察し雄株なることを認めたり。(別圖參照)

かつらに就ての解説

かつらは北海道に多く本州、四國、九州に分布す、九州にては少なし、本縣にては鞍手郡犬鳴山カツラギニ桂谷に數本の自生あり、方言カツラギといふ、八女郡矢部村、笠原村、御前嶽地方、朝倉郡寶珠山、筑紫郡南畑村、成竹山に數本あり。

かつらの異名はカツラギ、カツラノキ、カモカツラ、ヲカツラ、シロカツラ、タマカツラ等あり。

學名は *Cercidiphyllum japonicum*, S. et Z.

かつらは日本固有の植物にて、西曆紀元千八百四十六年獨逸の博物學者和蘭の軍醫シーボルトが我國に來り採集して命名したり。

漢名は桂を用ふるも大和本草に桂は、藥木ヤブニクケイの古名、桂花は木犀なり、桂は和名メカツラと訓ず、楓をヲカツラと訓す、その葉白楊ハコヤナギに似て兩々相對す、賀茂の祭に用ふるカツラ是なり、カモカツラと呼び古名はヲカツラなり、又筑紫にてカツラギと云ふ葉カヘデより大きな楓をカヘデと訓ずるはあやまれり。

かつらは山地の谷間の川に沿ひたる陰地に多く生ずる落葉喬木にて、高さ十丈餘圍は丈餘に達す、樹皮灰色にて淺き裂目あり、葉は對生して廣卵形鈍頭にて雲頭狀の鋸齒あり、葉柄長し、雌雄異株なり、花は單性無花被なり、雄花は稍無梗にて苞は無色なり、雄藥は多數、花絲纖細、葯は線形紅色なり。

建花寺の桂の由來及び傳説

同地の村瀬勝四郎氏の記事に依る

建花寺と稱するは鎮西國師(聖光上人)明星寺在住の時舞山の麓に一寺を建立し建花寺と稱す、舞山は白衣の老人白馬に跨り出でしかば、馬出山と書き後誤りて舞山といふに至れり。

舞山の南方に鈴川といふ所あり、老人出でしとき白馬の鈴の音聞へたり故に名づく、尙口碑桂は月中の神木なるを以て太陽此木の頂上に來るときは暫時休息せらると云ひ、舞山の南方

の谷を日憩といふを今は日ヨコ谷と云へり、桂の存する谷を舞山の内桂谷と云ひ其流れを桂川といふ、其流域を桂郷と唱へり、氏神を桂郷神社と稱す。

建花寺の婦人に難産に罹りたるものなしと云ふ、落葉を肌につけ安産の守とす、今もへ繩を張り一枝一葉と雖も切らず、毎日交代參詣潮井を取り區民の無事息災五穀豊穰を祈る。

舞山桂木の由來記

そもそも舞山と云ふ險山の深谷に桂木といふ名木あり、其邊一神埋りて二度御世に出でさせ給ふ事なしと云ひ傳ふ、其由來を尋ぬるに、人皇七十九代六條院の御宇安元年間一老人あり薪木を取らんとかの險山深谷をつたひて登りけるに、頃は陽春櫻花まさかりの時にもかゝわらず、四方靜にして物すごく只まじらの聲と諸鳥の蹄くのみなり、忽ち不思議の音して出づるものあるよし、老人は猪鹿の類ならんと思ひしに、遂に見馴れざる尊き老人身に白衣をつけて白馬に跨り老人に告げて曰く、我こそは此險山の靈神なり、諸人我を祭らば五穀豊穰諸病除去子孫繁榮疑なし、此深奥に當りて一つの奇木あり桂木といひは我身體なり、如何なることありとも此神木の枝葉を切る事勿れ、神木の根元より出づる清水に浴するものは難産の患なし、ゆめゆめ疑ふこと勿れと、云ひも終らずかき消すが如く忽然として失せ給ひければ、老人は不思議の思ひして我家に歸り諸人に語りしかば、人々數人打連れて再び深山に登りて尋ね見しに、果して不思議に神木ありければ、諸人奇異の思ひをなし、春秋二度の祭典を行ふに至れり、之を傳へ聞きたる近郷の人いづれも神木を拜見せんとて、日々の參詣人數千人深谷忽ちにして市をなすに至れり、遂にちごそかなる神殿まで建立ありしが、其後一百餘年一夜大風雨ありて神

御夢想御傳記

殿を破り且つ浪人隠れ住むとの噂立ちければ、諸人恐れて參詣するものなきに至れり。

もとそれ日本は神國にして道は即ち神道なり、故に天祖國常立尊を始めとして、天神七代、地神五代の神々のみ統御し給ひ、人皇は神武天皇に始まり既に九十六代の今に至る迄、天照大神の皇孫天行をしろしめして神より傳ふる三種の神寶を御身護とならせ給ひ、皇統萬々歲天壤と共に窮りなきは蓋し是神國なる、此故に日本は萬國に勝れる貴きことを記すべし、是日本は神國なれば神の教を神と云へる神道は即ち人道なれば朝暮身には離れざる道なり。

抑舞山桂木の由來は人皇九十六代光嚴院の御宇、將軍守邦親王正慶二年癸酉二月二十八日夜半頃、二十三四計りの女神垂髮冠裝束着し枕頭に忽然と現じ、是甚三左衛門汝が宅より申の方位に當る木山の谷奥へ三枝に生る夏木あり、此木世に類なき末世には必ず秋津洲の名木となる、而して此木の元より出づる泉を用ゆれば、人盛長壽、牛馬安穩、五穀豐熟せん、克民に傳へ給へ、吾が案内して教へくれんと宣へり、依て案内に従ひ登りけるに、大深谷口に着ければ左右より少し流れ出づる水音鈴鳴の如く聞へ、此處より凡二丁餘も登りけるに、二筋に流れ出づるを桂川の内浦と宣ふ、左桂の内川傳へ登りければ彌谷迫となり、誠に三枝に生る夏木ありける末世名を登せんものをと疑ひあるべからずと宣ひて消へ失せ給ふにぞ否や夢覺めけり、扱不思議なる正敷夢中とは思へども、神の御告なりと其儘捨てられじと、翌朝與平、平次郎を招き夢中の次第を語り含めけるに、兩氏誠に氏神の御告ならんと深く感じ、直に申合せ三人連れにて夢想の如く彼の山へ登りければ、あんの如く大谷口左の谷より少し流れ出づる水音鈴の鳴る如

く聞へけるにぞ、此處より凡そ二丁餘登るに左右に流れ出る桂川の内浦と教へある左桂の内川登り行谷の迫りと成る處を見れば、正敷三枝に生る夏木あり誠に氏神の夢想にして御告なるやと拜し奉りし故有難く再三拜し奉りて歸宅致し、郷中の人々呼寄せ委細夢想神のまにまに物話しし其上申合せ、翌三月三日上巳遊日なる故皆引連れ桂木の元に參りけり、誠に神の御告ならんと皆々肝心仕りける、其後ち字を舞山桂木桂川の桂郷名發致し、且又氏神に桂郷妙見宮と御尊號を拜し奉りける、誠に御夢想の有難き感ずるに餘りあり、仰ぐべし、尊むべし、之に依りて氏神の報恩謝徳の瑞として敬て此一巻を末世に傳へ殘す者也。

坂垣四郎高房末孫

正慶二年癸酉三月上旬

甚 三 左 衛 門

與 平

兵 次 郎

由來及傳説に關する年代其他に就て

鎮西國師(聖光上人)は筑前香月の人にして、應保二年(紀元千八百二十二年)五月生れ、建久八年(紀元千八百五十七年)京都に入り源空に歸依し、筑後善導寺の開山にして淨土宗鎮西派の始祖なり、嘉禎四年(紀元千八百九十八年)閏二月二十六日七十四歳にて歿す。

鎮西村の名は鎮西國師この村の明星寺に住し他に寺院を建立されたり、依つて鎮西村と名づ

く、今は明星寺、大日寺、蓮台寺、建花寺、舍利藏寺の地名のみ残り居れり。

舞山桂木の由來に、人皇七十九代六條院の御宇安元年間とあり、七十九代六條天皇は仁安元年より三年までにて紀元千八百二十六年より千八百二十八年までなり。

安元年間は第八十代高倉天皇にて、後白河法皇平清盛の執政の時なり、安元元年は紀元千八百三十五年にして二ヶ年なりき。

御夢想御傳記に、人皇九十六代光嚴院の御宇將軍守邦親王正慶二年癸酉二月二十八日とあるは、南朝にては後醍醐天皇隱岐へ御遷幸の年なり、紀元千九百九十二年にして今より六百三年前なり、癸酉の年は正慶三年にして正慶二年は壬申の歲なり。

桂郷妙見宮には伊弉諾、伊弉冉二神及天照大神を祭る。

天然記念物指定

文部省告示第三百十二號、昭和九年十二月二十八日

鎮西村ノ桂

所在地 福岡縣嘉穂郡鎮西村大字建花寺字舞山

指定地積 民有一筆内實測二段歩

説明 根廻周圍約三三、七尺多數ノ支幹分レ其ノ中大ナルモノ十數本アリかつらノ

巨樹トシテ有數ノモノナリ

指定ノ事由 保存要目天然記念物中植物ノ部第一ニ依ル

保存人要件 公益上必要已ラ得ザル場合の外枝葉ノ伐裁其ノ他樹木ヲ毀損スル虞アル行
爲ハ之ヲ許可セザルコトヲ要ス

かつらは溪谷陰濕の地を好み水邊に成長するものなれば、成るべく附近に樹木雜草を多く繁茂せしめ、自然林の状態にして土地の乾燥せざる様にし、根の周圍を開墾せず又踏み固めざるやうにし、樹枝に寄著蔓延するキヅタ、テイカカヅラ、サネカヅラの繁茂は、枝葉を害するものなれば注意を要す、枝を折り樹幹に傷けざるやう保護あるべきを望む。

終りに川上市太郎氏の御指導と村瀬勝四郎氏の御教示を賜はりたることを深謝す。

遠
賀
郡
香
月
の
大
學

遠賀郡香月の大櫨

調査委員 瀨 理 一 郎
 補助員 花 田 主 計

一、前 書 き

遠賀郡香月町大字畑字音瀧山(通稱櫨谷)國有林内(尺岳の麓)略地圖参照に櫨の大樹があると豫



大櫨の生育地を示す略圖、×印は其位置を示す

てから聞いて居り、調査の必要を感じてゐたところ、昭和八年十一月七日福岡縣東筑中學校教諭十時繁雄及び同校教諭永田時秀兩氏自から現地に出向いて調査された結果の報告書に、香月町略圖及び該樹の基部の偉大さを示した繪葉書一枚を添へて送附された。この報告書の中に該樹に就ての傳説なりとて、大正十四年十月二日編纂の香月村誌第二八頁に記載の名木大櫨の記事を其儘引用報告された。曰く

本村大字畑の尺岳の麓に大櫛の老樹がある。周囲三丈餘で高きは之を量る事を得ないが二千年以上を經過して居る事は事實らしい。古人の傳説によると日本武尊本村に來られ賜ひし時熊襲の情況を視察せんとして尺岳に登らせ給ふ時紀念として御手植へなし賜ひしものであると謂ひ之が爲め同所を櫛谷と稱ふるに至つた。其筋も稀有の名木として保存されて居て恰も二千年以前の當時を物語るものゝ如くである。

この傳説の眞偽及び樹齡に關する想定の正否は筆者等の關知するところではないが、兎に角之を以て該樹が一地方に於ける名木巨樹として、民衆の間に尊重されてゐることを知るに足るのである。又該樹に關する福岡縣學務部社寺兵事課史蹟名稱天然紀念物係川上市太郎氏からの報告中、同氏の聞き書きとして「年齢一千年以上のも」と言へり、神木と唱へ若し伐採する時は風波起ると云ふ」との記事がある。

前記十時及び永田兩氏の調査は該樹の落葉期十一月中に行はれたものであるから、更に夏期の枝葉繁茂期に於ける情況をも視察し、樹勢の現状を知る必要を感じたので、調査委員額續自ら現地に出張して調査を實行する豫定であつたが、外國出張のためそれを果し得ないことゝなつたので、代理として九州帝國大學農學部植物學教室助手花田が出張し調査することゝなつた。

花田の出張調査は昭和九年八月二十一日に行はれ、當日の調査は香月町助役加藤助九郎、香月小學校訓導末永實兩氏の案内援助に負ふところが大である。この調査報告はこの日の調査を主とし、前記十時、永田兩氏の調査報告、川上氏からの書信及び直方營林署技手藤崎久氏からの回答書等を參照して成つたもので、この機會に於て是等の關係援助者各位に對して謝意を表示する。なほ該樹の生育地は要塞地帯に屬し寫眞撮影の自由を持たないので、特に香月町一六二七在

住の寫眞師山本廣吉氏を煩はし、必要な寫眞は同氏をして下關要塞司令部へ撮影許可並びに檢閱を受けしめ、之を提供して貰ふ事にした。茲に併せて同氏の勞を深謝する。

二、樹勢及び大きさ

現在に於ける樹勢は良好で枝條よく繁茂し、葉の着生状態も良好、附近に於ける雜木の群を抜いて聳え、樹相公孫樹形を呈してゐる。雜木の密林中にあるを以て見通し利かず、全樹形の寫眞を撮るを得ざりしは遺憾であつた(寫眞參照)。

樹幹は直立に伸び、

幹圍地上凡そ二米のところにて 六・五四米

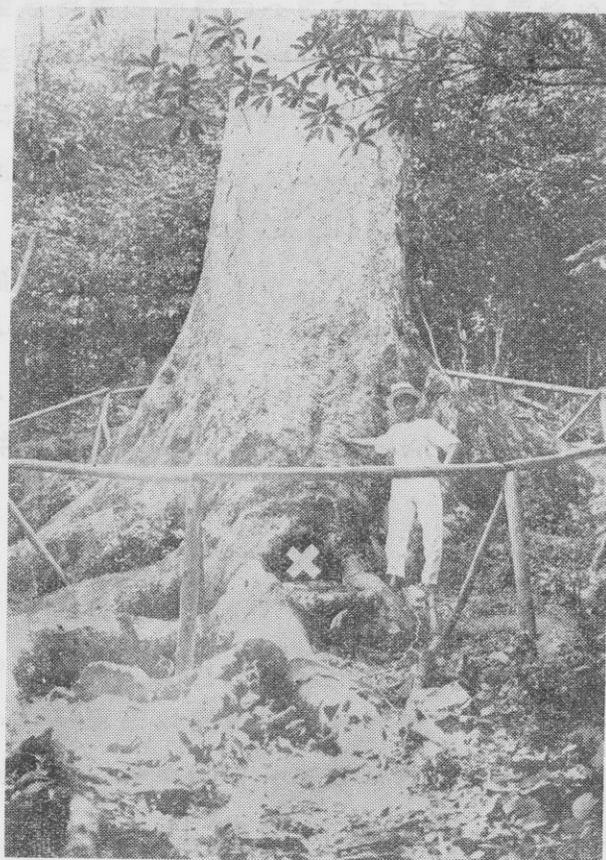
” 一・五米 ” 七・五一米

を算し、基部に向つて漸次太くなりて、四方に放射する根の露出部に移行してゐる。試みに幹より根への移行部に於ける周回を、その表面の凹凸を入念に追隨して測定して見ると一・四三米を算する。樹高の測定は見通しの利かざると、現地地の地勢が平坦ならざるとにより、正確を期する事困難であるが、

樹高 約 二八〇〇米

と見て大過がない。

直立する樹幹は地上目測約七・五米のところにて第一巨枝を北方に分岐せしめ、上方約二米を隔て、第二巨枝を東方に分出せしめ、以上次々に多數の枝を出してゐる。樹幹の表面樹皮には蘚類地衣類等を夥しく着生せしめ、豪壯なる感じを興へてゐる。



A

B

大櫛の根元の状態を示す写真、A北方より、B東方より、白色×字は腐蝕部の位置を示す

放射状に出てゐる側根の基部の地上に露出してゐるもの約十本あり、地上露出部の長さは二米乃至六米に達し、盤石然たる樹幹基部の強豪さを示してゐるけれども、北面の樹幹基部に縦七五糎横五五糎に達する略楕圓形の腐蝕部を生じ、又東北に向へる一側根の露出部表面に人為的な古傷の腐蝕部化せんとするもの三個に及び、この儘放置する時は腐蝕部の自然増大によりて樹勢に害するに至る虞がある(寫眞參照)。

幹や枝の部分は概して壯健なる状態にあるが、第一巨枝及び第二巨枝に何れも可なり大なる腐蝕部を生じつゝあり、之もこの儘放置する時は、漸次その増大を來す事必然である。

該樹の基部には現在營林署の手によりて杉丸太を以て簡單なる柵が設けられてゐるが、根元に前記の古傷を見る外、幹部に木質深く刻み込まれた樂書きの新らしいのが少くなく、該樹保護の不完全さを痛感せしめられる。

三、現地の狀勢

該樹の生育する地は北に溪流を控へ、東は小谷狀濕地に接してゐるが、比較的水濕少き北面する二五度内外の緩斜面地で、昔は附近一帯が櫟を主とした林地であつたと言はれてゐるが、現在では附近には該樹以外に櫟の大樹を見ず、主として十四五年生位と思はれる高さ一〇米乃至一五米の種々の潤葉樹が鬱蒼として茂り、地面への日光の直接射入を殆んど防止してゐる程のところ、該樹のみが是等の群小樹木を抜いて高く聳えてゐる。東に五米内外を隔て、小谷狀濕地を界として、二十年生位の杉の民有造林地があるが、現在では之が該樹の發育に影響する様な傾向はない様である。

該地は尺岳への登山小徑路へ僅々五米内外を隔てゝゐるのみで、通行者の立ち寄り觀覽が容易であり、且つ地方の一名勝地として知られてゐる。音瀧觀音へ遠からざる關係上、觀音參詣の序に該樹觀賞に立寄る者が少くなく、年々相當多數の觀賞者を招いてゐる。随つて心なき者による樂書其他によりて樹勢を害する事日と共に多きを加ふる虞がある譯で、該樹の保護を一層徹底させる方策を講ずる必要があると思はれる。

英彦山に於ける佛法僧

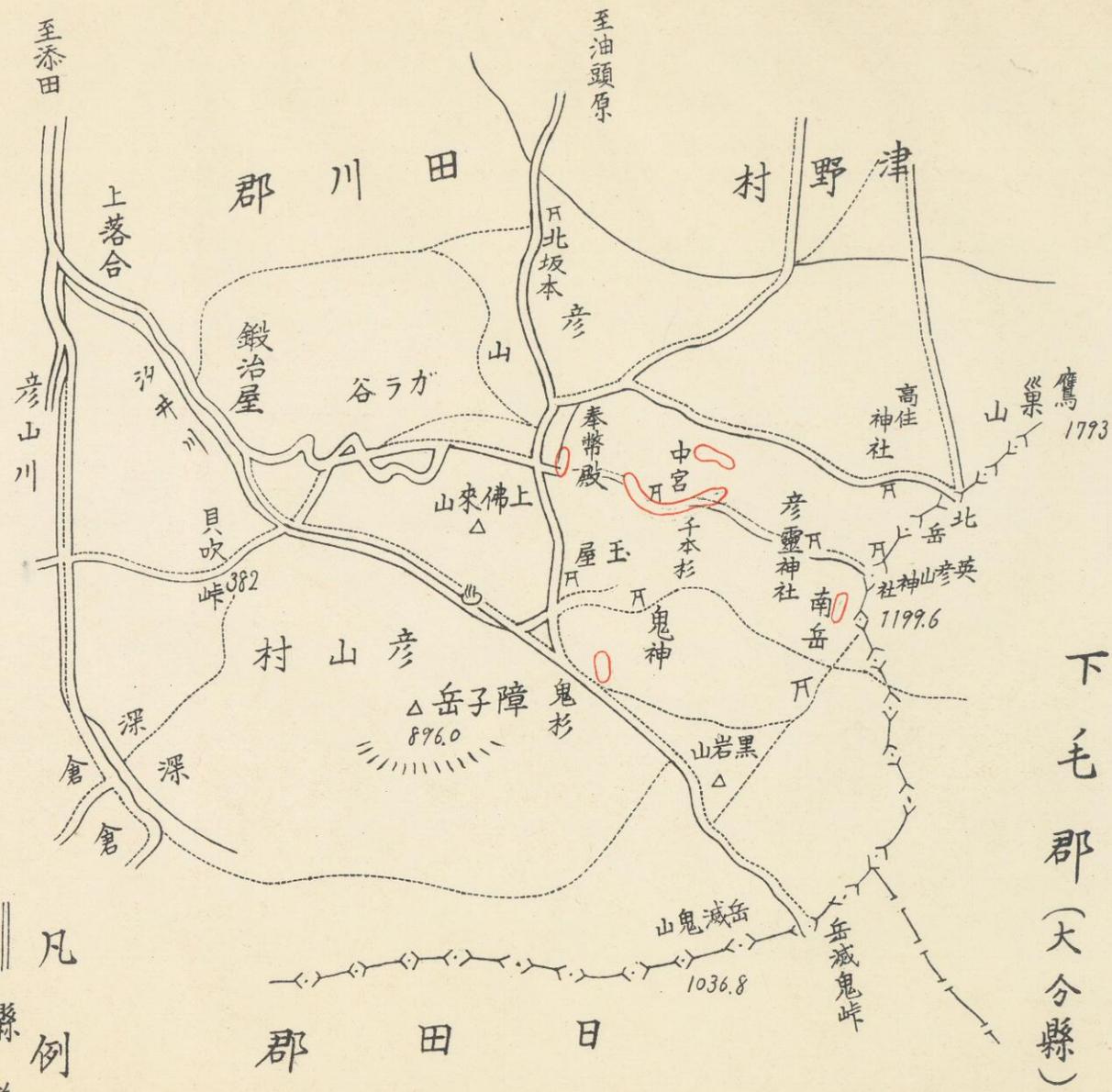
(第一回報告)



佛法僧(佛法僧目、佛法僧科)
Eurystomus Orientalis (L.)



佛法僧渡來地略圖



下毛郡 (大分縣)

凡例

朱線 凡 縣里縣道
 佛僧渡來地 神國縣里縣道
 祠界界道

(縣分大)

英彦山に於ける佛法僧

Eurystomus orientalis (L.)

(第一回報告)

調査委員 安部 幸六

はしき

抑も英彦山は海拔一一九九六米突福岡、大分兩縣に跨り山岳重疊森林鬱蒼として雲を呼び其昔天台宗の修驗場のあつた處で數百の僧坊軒を並べ自然殺生禁斷の地として全く鳥類の樂園であつた。従つて各種の鳥類に富み佛法僧の如きも相當此地に飛來してゐたものであつたと古老の言である。然るに明治維新狩獵自由となり夫れが爲に鳥類は頓に減少したことは甚だ遺憾に堪えぬ處であるが、幸ひにも大正十二年此地を國設禁獵區に編入せられたので、各種の鳥類は又年を追ふて渡來又は蕃殖する様になつたのは實に喜ぶべき現象である。而して一時全く影を絶ちし佛法僧の如きも昨年來其飛來を報告する人があり余は聊か疑念を有してゐたが、今回運よく此鳥に遭遇し而も其鳴聲迄も親しく耳にする事が出來たのは所謂三法の功德とでも云ひたい位で、茲に其目撃した當時の日記を掲ぐる事にした。

八月二日 晴天 (佛法僧の正體を見る)

英彦町田川郡彦山村大字英彦山にある官幣中社英彦山神社々務所を出發したのは午前八時

であつた。當地駐在巡査石橋賢市氏及上宮勤務川上正信氏と共に所謂上宮本道を沿道の夏鳥を觀察しながら登攀する中一の鎖より約二十間餘り前方に來るや、川上氏は慌しく余の服を曳ひてあれですあれです我等の云ふ佛法僧はあれですと余を促したので、直に雙眼鏡を取り出し鳴聲を便りに前面の大杉の根本に駆けつけ仰視する中、二羽の黒い鳥は飛び去つたが、尙一羽が盛に啼いて居るので夫を目標として一の鎖の坂を攀ぢ登り追ひ行くと、中宮附近の老杉に止つて頻りに鳴いて居る。直ちに雙眼鏡を其方に向けて見たが光線の都合か鳩より一寸小型で只黒く見ゆるのみであつて、佛法僧の特徴らしい處を認めなかつた。鳥は次第に千本杉地名方面に移り行くので、吾々も亦體を匿しながら之に接近し初めて肉眼で熟視すると、今迄黒くのみ見へて居た羽色は幾分青色を帯びて見へ、且又其中の一、二羽の翹の風切にある白い紋を不明瞭ながらに見る事が出來、且つ鳥の格好飛様からして佛法僧なる事を認めた譯である。此時何時の間にか四羽となつてゐた思ふに二番であつたらしい。

余は茲に年來の謎を解決した様な喜びに満ちて早速其場で手帳を出し時計地圖等眺めながら次の如く記載した、一行の人々も大いに喜んだ。

一、最初此鳥の鳴聲を耳にしたのは午前八時五十五分であつた。

二、高度、海拔約九七九米。

三、鳥體に最も接近したる距離、七十二米乃至九十米。

四、鳴聲が、イグイグ、又はグリグリ、と連呼し其聲は非常に高く耳をきしり恰も金線蛙が春季苗代に集りて喧噪するが如く、或は此の蛙が蛇に吞まるゝ時の悲鳴にも似て居

る點もあつた。又聞き様では酸醬サツキを口中に含みてならずが如き感もした。赤山や谷に響いて、
大ヨシキリの鳴聲に似た處もあつた様である。

右の觀察は何れも樹上樹枝に止りての發聲で、一つの枝に三分以上靜止しなかつた。夫から千本杉の上空及中宮の上方を飛び代ふ時の鳴聲は明らかに聽取する事が出来なかつたが、どうも「キヤッ、キヤッ、」又は「ケッ、ケッ、」とも聞えた。

次に此鳥が夜啼くものか否やに就いては、左記三日の項記せる通り再調査を行つたが全く一聲だに其啼聲を耳にせず、又豫て此山に永年住む人々の談別項によつても夜間は聽いた事が無いとの事である。然し茲に考へて置かねばならぬ事は余の觀察した時此地には居なかつたのではないかと云ふことである。又彦山の人の耳にせないと云ふことも都合よく出會はなかつた。云ふことに過ぎないかとも思ふ。要するに夜間なくや否やと云ふ問題はしばらく疑問として置く。尙晝間の啼聲即ち鳴型キナカマノキ鳴様オキザマ其節フシが余の聞いたのより外にはないと斷言するものではない。總て鳥には其環境と時に因つて種々の鳴音を出すもので、又聞く人の耳にも同じ鳴聲が異様サマに響くものであることを辨ソキマへる必要がある。只茲には余の耳にしたのを其儘率直スラに寫述した迄である。

五、聞いた時の環境

余が此鳥を目撃して慥かに聞いたと云ふ千本杉チンボシキ乃至中宮夫ナカミヤウから一の鎖等ツラの地點は英彦山禁獵區の中心で、一帯老杉の密林である。而して中央に一問幅位の參道が貫通して居る。海拔九七九米で平素至つて寂寞な處である。此邊には檀鳥カクアオゲラ等多く又鼯鼠ムササビも棲息して居るので杉の

老木には幾つもの等の出入する空洞がある、或は此孔の中には佛法僧が利用してゐるものがありはせぬかとも思ふ位である、尙別項彦山森林主事早野儀一郎氏の觀察せる國有林第六十八林斑の地點は海拔八五〇米の高處で、一帯に縦の老木で此邊只間道あるのみで人氣に乏しく淋しい處である、序ながら余が最初此鳥を目撃して千本杉で四羽となり飛び去つた迄の時間は約四十分間位であつたと思ふ。

一行は之から頂上に登り、此邊の鳥を調査し川上氏とは此處で別を告げた。

頂上から道を轉じ中腹から道連となつた福岡齒科醫專の辛島清澄君外數名の中學生と共に昨年佛法僧が飛來したと報告ありし南岳(海拔一九九六米)に辿りついた、茲には展望臺があつた、此邊念の爲め調査したが全く影を認めなかつた、夫から材木岩を經て鬼杉に行く途中、杉縦の密林を調査しながら學生諸君に對し佛法僧其他の説明を試み調査の助手となつて貰つた譯である、谷間の鬼杉に着いた時は早や午後の三時であつた、茶店に腰を卸し一同携帶の中食をすました、地圖を擴げ磁針を見て色々途中の日誌を記した、茶店の者に佛法僧の話聞いて見たが駄目で得る處はなかつた、此方から東方に道を攀ぢ登り玉屋神社に出で、更に梵字ヶ岩を經て、途中各種の鳥を觀察しながら天幕村に來ると傍らの竹林には鶯が盛に啼いて居た、此邊が昔の座主跡で鶯多く昔から鶯谷の稱ある地であると聞いた、此處に天幕村が經營されて居た、同行の學生諸君は此テントに泊るので、こゝに惜しき別を告げて再會を約し、余は再び元の道に歸り奉幣殿前なる社務所に入り佛法僧のことを報告的に高千穂宮司其他社務所の人々に話した。

此夜午後八時から修道館公會堂のもので天幕村及彦山町有志主催の講演會に出席して彦

山の鳥と題し約一時間餘講話し、講話の中には佛法僧のことも稍委しく説明した處、講演後、聽衆の古老は此鳥につき色々昔話をして居たが、大體に於て別項高千穂男(宣麿殿)の意見と大同小異であつた。

八月三日 晴天 (夜間の觀察)

午前六時半に旅館白梅を出發した、今日は只獨りで豊前坊即ち高住神社に詣で此附近の杉椏の森の中を念の爲め佛法僧に注意したが、只カケスのギヤア、アホゲラのクエツ、カラカラ等の鳴聲等を耳にした迄であつた、唯一軒ある茶店に休み佛法僧の鳥に就て平易に聞くと、主人岡村貞治君夫妻は交々語つて曰く、一ヶ月許り前であつた、彦山町の八尋某は午前三時半頃佛法僧を見且つ、ブツポウソウと鳴くを聞いたと話して居た、(安部惟ふに多分他鳥の鳴聲を聞いたものと想像する)

此處でルリの巢(黄鶺鴒)の巢を採集し元來し道を少しあと歸り、問道を昆蟲採集しながら奉幣殿の直下に出た例によつて社務所を訪れ、高千穂宮司(男爵宣麿氏の嗣子)及び松養禰(宜)其他社務所の人々から佛法僧其他の鳥につき種々聽き取り、一々手帳に控へた、かくして、昨日の收獲に興味を持ち同じ箇處迄登らんと種々準備を進めて居ると、折よくも前記昨日同行の石橋巡查が私服で添田警察署の刑事二名と共に山から降つて來たので、社務所に招き佛法僧のことを聞くと、同人曰く、幸ひ今日而も昨日と同時刻頃に千本杉、中宮の處を通過するので、心は犯人の捜査に奪はれながらも、特に注意したが、夫らし鳥を全然見當らなかつた、従つて其鳴聲も聞かんでした、と警官らしい報告的言に余も大に同君の話信じ徒らに同處に行くことを思ひ止つた、一應社務

所を辭し宿に歸り少し早かつたが中食をなし、日誌を付け終ると恰度正午であつた、午後五時迄昆蟲の採集をなし午後六時頃から夜間の觀察をなすべく懷中電燈さては提灯、蠟燭、菓子など準備して先づ社務所迄行くと、當直の蒲池神職は何分夜間の登山者は一々社務所で差止めて居る位だから單身の登山はとて給仕の廣澤公幸君を同行さして下さつた、斯くて午後七時と云ふに社務所を出發、途中種々の觀察希望を夢みつゝ昨日の道を辿り午後七時四十分頃には一の鎖りに着いた、流石の夏の陽も山から山に入つて暗黒であつた。

途中一の鎖の少し前方の道路の兩側にハシホクカラス嘴細鳥の大群が泊つて居た、此鳥は午後四時頃には彦山町の裏の方豊前坊道の附近に群れて居た、町の人等も今頃鳥の群を見るは珍らしいと云つて居た、何れにしても此鳥は佛法僧の爲めにはよくないと思ふ、然し果して此鳥によつて此鳥が逃げたか否か等は判らない、只々鳥が昨日佛法僧の居た附近に泊つたと云ふことを記して置くのである、兎も角も一の鎖り附近には佛法僧の影も聲もせなかつた、夫から中宮に至り堂宇に腰を卸し、菓子など食しながら氣永く約三十分以上も待つたが、只夏の夜の高山の物淋しさ、風の音のみで他鳥の聲すら聞かなかつた、更に進んで千本杉に至り岩上に席を占め、此處にも腰打据へて所謂佛法僧を待つた、此地は前記の様にムササビの棲む處であるので夫の鳴聲にてもと注意して見たが更らに聞へず、只油蟬アブシメの何に驚きけんギと啼く聲がした迄であつた、時計を見ると早や午後十時を過ぎて居たので斷念して下山の途に着いた、夜の道は案外速かつたが方向がさつぱり見當が違つた、天幕村や町の燈火が變な方向に見へた、案内の廣澤君に尾して急ぐ程に早や社務所に着いた。

社務所附近には昨年も佛法僧が来たとの事で、本年も一ヶ月前に慥に見たとの事であるから此處で暫く観察して見ようと、社務所の椽に腰掛け約一時間餘待つて居たが物音一つ聞へず森として物すごく感じた、斷念して廣澤君に別を告げ約百メートルも降つたと思ふ頃廣澤君が慌しく余を呼び返したので急ぎ踵を返して元の處に行くと社務所の横の大杉に鼯鼠ムササビが居るとの事で潜行して其樹の許に行くとヒユルヒユルと昆蟲の鳴聲の様に聞ゆる、そして暫くすると黒き姿となつて隣りの低い杉の樹に飛び移つたので正體を見届けた譯である、佛法僧は聞くことが出来なかつたが景品にムササビを聞いたと笑ひながらこゝを辭した。

尙此山中には次の各種の鳥類が棲息して居るので、自然其鳴聲を直に佛法僧と誤認して居る人がある様に考へらるゝ、今參考迄夫等の疑はしい鳥を擧げて見ると次の様である。

△九州梟キタシロハコ

Syrnium uralensis fuscescens (Temminck & Schlegel).

此鳥は普通の鳴聲は「ホッホーホー」又は時ニ「ホッホー」など聞ゆるが夫を「ブツポウ」と誤り聞くのではなからうか。

△郭公カクモウ

Cuculus canorus (L.).

「カッポウ」と鳴くのを夫を又「ブツポウ」と聞き誤るのではなからうか。

△筒鳥

Cuculus saturatus (Hodgson).

「ポウ」と普通に鳴くのを聞くが夫を又「ブツポウ」と聞く人がありはせんか。

△アホバヅク *Ninox scutulata* (Raffles).

普通此鳥の鳴聲は皆「ホー」と聞こゆるが夫を又聞き様で「ブツポウ」と誤つたのではな

すか
△雉子鳩キジト

Turtur orientalis (Latham).

普通常鳴は「トト、トウ、トウ」と吾々の耳には聞ゆる様であるが、此鳥が時によつては青鳩の鳴聲に似た「ホッワー」と云ふ様に聞ゆることがあるので、夫と又此佛法僧とを間違へらるゝ場合も想像して置かねばならぬと思ふ。

英彦山に棲む人々の説

此地に永住する人々の佛法僧に関する説を聞いて見ると次の様である。

1. 男爵高千穂宣麿氏の談

昨年(昭和八年)同男よりの報告に依ると四月二十六日英彦山中、南岳と中岳との上空を二羽の佛法僧がケツケツと鳴いて飛翔ヒシマクして居たと、今回當地滞在中數回同邸を訪問して佛法僧に関する御意見を承つた談に曰く、此山に佛法僧の盛に來たのは明治二十五年から三十年の頃であつた、當時上佛來山(英彦山)の一小峯などは縦其他の淵葉樹が鬱蒼として茂り之等の鳥の棲息蕃殖には好都合であつた、其後自分も東京に出て觀察者もなくなつた譯で、只來ない様になつたと漠然とした話であつた、兎に角一時來ない様になつたことは事實であつたらう、夫が昨年からは眼に着く様になつた譯である、然し彦山地方で昔から高野の佛法僧、彦山の御祈禱鳥オキトドリなる語があるが、其御祈禱鳥が果して佛法僧の別名なるや余は大に疑ふ、或は梟フシツツの一種が或時に發する鳴聲ではあるまいかと思ふ。

(安部惟ふにゴキトウ鳥の話は以前から高千穂男の説に共鳴する者である、然るに今回の調査

中社務所で聞いた話に六月頃、人の怒噴するが如き、或は米を搗く時の掛聲の如き鳴聲の鳥が居ると聞いた時、早速頭に來たのは之が御祈禱鳥ではなからうかと考へた譯である、然し此鳥は慥にヤマイボ(ミゾゴ)に違ひないから、先づゴキトウ鳥の正體疑問として置く。

2. 早野儀一郎氏の談

早野儀一郎氏は昭和七年三月直方營林署彦山擔當區森林主事として着任された人である、爾來職務の傍ら此山の鳥獸に注意觀察せられた人であるから、今回佛法僧に就ても話を聞く爲めに立寄つた處が不在であつたから已むを得ず、調査の項目を示して回答して頂く様依頼して歸つたすると早速八月二十三日付の次の書信に接したので原文の儘左に掲ぐることにした。

(1) 目撃せし場所

英彦山國有林六十八林斑、縱學術參考保護林、海拔約八百五十米、鬼杉より東方約六百米上方に於て始めて距離約百米の處にて目撃せり、爾來同縱天然林より岳滅鬼峠附近の針濶混肴林へ交互に十五六羽の佛法僧鳴き飛翔するを見受けたり。

(2) 飛來期節

本年六月二十七日前記の處に於て實見せしが、始めは飛來期判明せざるも昭和八年六月初旬頃高千穂男爵見受けられたるに付六月初旬頃と思慮せられ候。

(3) 佛法僧の彦山に於ける棲息期

最近前記場所附近に於て八月十八日見受けたるも、今後尙何日頃迄棲むものなるや調査中なり。

(三) 佛法僧の鳴聲

百五十米突内外の處を睦しく鳴き交すを聞く、其鳴聲は「ギャツ／＼／＼」と底力ある聲なり。

(四) 佛法僧の夜間の鳴聲

毎年造林事業實行の爲め前記樅天然林より約百五十米を隔つる英彦山斫伐事業所へ宿泊し、本年も七月初旬より殆ど引續き宿泊せるも、夜間佛法僧らしき鳴聲一として聞及びたることなし。

3. 石川秀則氏、熊懷充彦氏、川上正信氏等の談

前記八月二日及び三日の兩日英彦山神社々務所に出頭した時、同所勤務主典石川秀則氏、同熊懷充彦氏及び上宮務めの川上氏から種々の鳥談を聞いたが、其内佛法僧につきて又次の如く三氏は交々語つた。

昨年夏頃から佛法僧が又此彦山に來る様になつた、最初は大に疑つて居たが男爵のお話を聞き間違ひはなからうと思つて居た、今年も六月下旬頃から奉幣殿の老杉に幾度も來て又其上空を舞ふて居るのを見た、然し此頃は一向に眼當らぬ様である、鳥體は鴨ヒヨより一寸大形で全身黒く見へ翼に白い紋がある、鳴聲は栗斗アホりゲ啄木鳥ラの様にキャツ／＼と鳴いた様でした、今明瞭には眞似は出來ん、然し何と考へても「ブツポウツウ」とは聞き取れなかつた、(安部惟ふにキャツキャツキャツ等は飛びながら鳴く聲ではないかと考ゆる)夜間の聲は聞いたことはない。

尚川上氏は毎日上宮道を往復さるゝこと、連今後の觀察を依頼して歸つた、すると八月八日付

で次の意味の返事に接した。

其後毎日上宮へ出勤の沿道注意したるも八月二日以来全く目撃せずと。

因に同氏は毎日午前八時社務所を出發上宮に登り一日の奉仕を終へ、午後六時過ぎ下山の日程さうである。

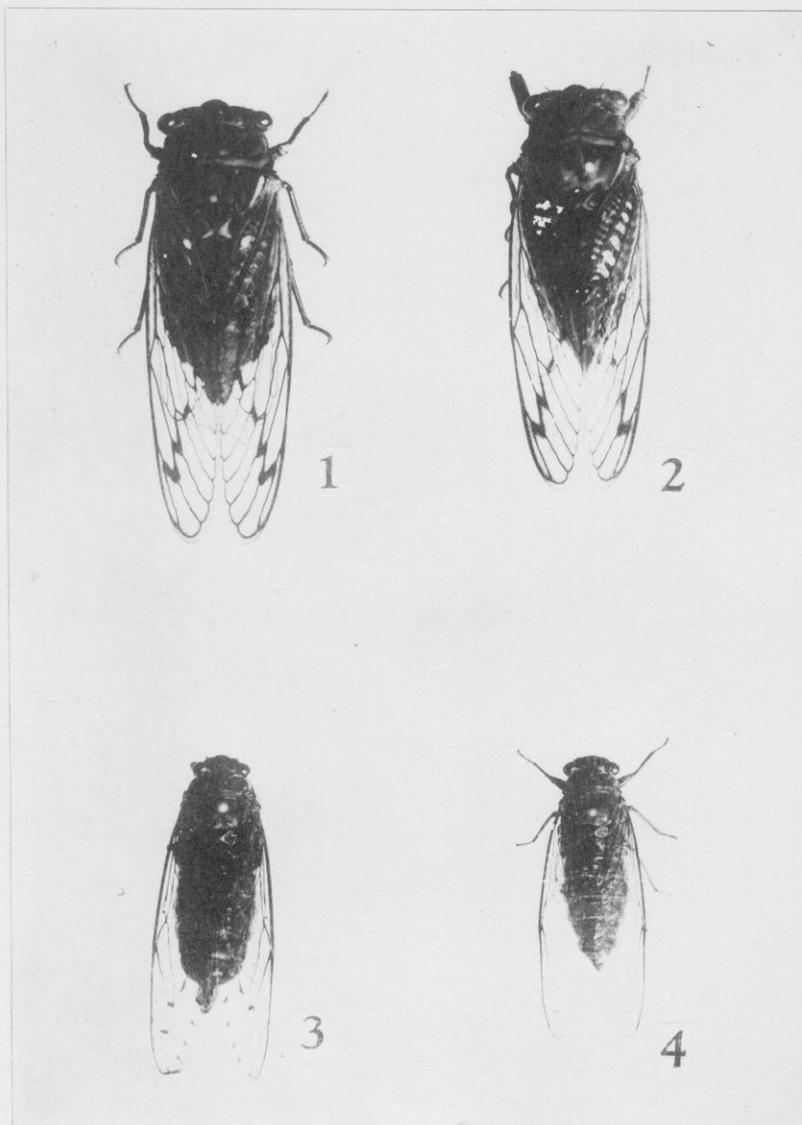
佛法僧の外貌 (寫眞説明)

本寫眞は余の有する剝製標本で勿論英彦山のものでない、十數年前京都島津標本社から購入したもので採集地並に採集年月も不明である、今之につき外貌其他を見るに次の様である。

野外で見ると本文記載の通り眞黒く見ゆるが、手に取つて見ると緑青紺等打交つて複雑な色彩で一見緑黒の鳥と云ひたい位である、大さは雉鳩より小型で先づ鴨ヒヨにして胴ヒヨに丸みある鳥である、脊は青味ある黒色で頭上及び顔は黒く光澤なし、喉は黒いが紺色の縦條がある、腹部は青くして黒みがある、翼の上面は黒みある青色で又風切羽は黒色を呈して、其外縁に青い處や紺色の處が見へて居る、初列風切の基部に青白い大きな紋様がある、或地方で紋紺鳥モンコンテウと方言するのも蓋し之からであらう、尾羽は黒色で外縁の基部に紺色の部がある、嘴は赤いから、此標本では油繪具で補色してある、上嘴の尖端は曲り其處丈け黒色を呈して居る、脚も赤色である。

翼長は二一〇耗、尾長約一〇三耗、正しく測定出來ず、跗蹠一〇耗、嘴峯三〇耗、體長二五五耗である、凡て此測定は標本であるから幾らか捕獲直後のものとは相違があるかも知れん斷つて置く次第である。(完)

福岡縣に於いて注意すべき蟬



1. エゾゼミ
3. エゾハルゼミ

2. キウシウエゾゼミ
4. ヒメハルゼミ

福岡縣に於いて注意すべき蟬

調査委員 江崎 悌 三

蟬は元來熱帶地方に於て最も繁榮する昆蟲類の一群で、極めて少數の種類を除けば、何れもその雄に複雑なる構造の發音器を有し、千變萬化の鳴聲を發し、爲に世界至る所、古くより人の關心を有つた昆蟲である。その發音器の構造と、發音の機構とは極めて複雑で、最高の人智を以てしても到底之を模倣することは不可能である。特殊な少數の場合を除けば、蟬は元來人類に對しては利害關係のない動物である。それにも關はず、此の如く人の注意を惹いた所以は、全く右の發音の習性によるものである。本邦には蟬の種類多く、世界の同緯度にある何れの地方と比べても劣らないであらう。又各地に於て小兒の遊戯の對照となり、或は詩歌に詠まれ、その民俗的關心の深い點に於ても、特筆すべきものがある。よつて特に蟬に關して一文を草し、福岡縣に於て注目すべきもの二三に就いて解説したいと思ふ。

一、福岡縣に産する蟬

余が今日までに福岡縣下に産することを確め得た蟬の種類は十一に達する。今之等を列舉すると次の如くである。

- | | |
|---|----------|
| 1. <i>Platypleura kaempferi</i> Fabricius | ニイニイゼミ |
| 2. <i>Graptopsaltria nigrofusca</i> Motschulsky | アブラゼミ |
| * 3. <i>Tibicen japonicus</i> Kato | エゾゼミ |
| * 4. <i>Tibicen kyushyuensis</i> Kato | キウシウエゾゼミ |
| 5. <i>Cryptotymbana japonensis</i> Kato | クマゼミ |
| 6. <i>Tanna japonensis</i> Distant | ヒグラシ |
| 7. <i>Meimuna opalifera</i> Walker | ツクツクホウシ |
| 8. <i>Orcotymbana maculicollis</i> Motschulsky | ミンミン |
| 9. <i>Terpnosia vacua</i> Olivier | ハルゼミ |
| *10. <i>Terpnosia nigricosta</i> Motschulsky | エゾハルゼミ |
| *11. <i>Euterpnosia chibensis</i> Matsumura | ヒメハルゼミ |

右の十一種の中ニイニイゼミ、アブラゼミ、クマゼミ、ツクツクホウシ、ハルゼミの五種は縣下に
 廣く分布する普通種であり、又ヒグラシ及びミンミンの二種も縣下の山地に多産し、又これ等の
 種類は本邦の他地方にも普通のものなるを以てこゝには詳記しない。之に反して*を附した四
 種即ちエゾゼミ、キウシウエゾゼミ、エゾハルゼミ、ヒメハルゼミの四種は特に注目すべき價値あ
 るものなるを以て、以下に少しく詳述したいと思ふ。

尙福岡縣下には將來の探索により更に一二種を加ふことは可能であると思ふ。殊に *Melan-*
psalta radator Uhler ナツチゼミ及び *Tibicen flammatus* Distant アカエゾゼミ(肥前雲仙岳に産す)の發

見は期待し得る所である。

二、エゾゼミとキウシウエゾゼミ

エゾゼミの類(*Tibicen*)はその名の示す如く北海道に普通なものであるが、その中エゾゼミ *Tibicen japonicus* Kato とキウシウエゾゼミ *Tibicen bihamatus* Motschulsky の二種は殊に古くから知られてゐた。尤も古い時代のエゾゼミといつた中にはエゾゼミの外にアカエゾゼミ *Tibicen flammatus* Distant も混同されてゐた。その後研究の進むに従つてこの属の蟬は樺太、千島、北海道、本州、四國、九州、朝鮮、即ち日本内地の廣範圍に亘つて分布してゐることが明かとなり、又その種類も六種に達してゐる。然し本州以南にあつては孰れも一〇〇〇米以上の山地に棲息してゐると言つて差支ない。尙余は最近臺灣の高山地方にも同属の一新種の棲息してゐることを知つた。九州にはこの属のものは現在三種知られてゐる。今その名稱と既知の産地とを挙げると次の如くである。

1. *Tibicen japonicus* Kato

豊前英彦山

エゾゼミ

2. *Tibicen flammatus* Distant

肥前雲仙岳

アカエゾゼミ

3. *Tibicen kyushyuensis* Kato

豊後久住山、豊前英彦山

キウシウエゾゼミ

即ちエゾゼミとキウシウエゾゼミの兩種が福岡縣田川郡の英彦山に發見されるもので、ここ

福岡縣に於いて注意すべき蟬

にこの兩種の同地に於ける來歴を略述することとする。

エゾゼミの英彦山に産することは高千穂宣麿男爵によつて古く明治三十三年(1900)に發見、記録されたもので、その當時の標本は今日も尙同男爵の許に保存されてゐる。この種は今日も尙同山には多産するが、その産地は比較的高い所に限られ、正面の登山路にあつては中腹の奉幣殿上方の杉林から出現し一の岳附近には最も多く、更に山頂の上宮に至るまで廣くその聲を聞くことが出来る。又彦山町から高住神社(豊前坊)に至る間の諸所にも産するし、更に中腹に近く孤立した上佛來山(684m)にも産する。英彦山に於ては七月の末頃から出現し八月中頃までが最盛期で、それから次第に少くなつて九月に入ると急に減つて了ふ。殊に多いのは杉と松の林で、その巨木の高處で鳴いてゐることが多いので、採集は極めて困難である。本種は北海道、本州、四國及び朝鮮にも産することが知られてゐるが、九州では未だ英彦山以外から採集された記録がない。その喧噪な強聲と美しい斑紋のある大形な點とで特に注目されるものである。

キウシウエゾゼミは大正十五年(1926)に加藤正世氏により豊後久住山の標本に基いて記載された稀品で、同地産の標本は余も亦之を檢したことがあつた。その後余は本種の四國産の標本を得て、昨昭和九年(1934)に之を記録した。その後本種の記録を見なかつた所、昨昭和九年(1934)夏に至り、高千穂宣麿男爵は英彦山に於て本種をも二頭採集された。ここに於てこの稀種が本縣下にも産することが明かとなつたものである。その採集日附は八月十六日及び同二十三日であつた。本種は右のエゾゼミに混じて同じ場所に棲息するものであるが、その數はエゾゼミに於けるよりは少い様である。鳴聲は兩者の間に區別を見出すことが困難である。

この屬の蟬は元來北半球の溫帶圈に特に廣く分布するもので、本邦に於ては北海道以北では平地に、本州以南では山地に分布するもので、殊に四國や九州等では純粹な山地性の昆蟲で、本縣下の山地に本屬の二種を産し、且その一種は九州及び四國に特有な稀種であることは、特筆する價值のあることである。

三、エゾハルゼミ

エゾハルゼミは春期平地の松林に極めて普通なハルゼミと同屬の昆蟲であるが、その鳴聲習性、分布等はこれと甚だ相違があり、その名の示す如く本邦では北部に多い種類で、その分布状態はエゾゼミと相似た所がある。その出現の時期が登山の最盛期に先立つ爲や、又その分布が極めて極限されてゐる爲に、人の注意を惹かぬ蟬であるが、本種が福岡縣下に産することは學術上注目すべき事である。

本種は九州では肥後五箇莊にも發見されてゐるが、他からは未だ記録がない。英彦山では古く高千穂男爵によつて發見され、明治四十四年(1911)に記録された。同地では頂上に近い山毛櫨(ブナ)林に發見される。このブナの純林は植物學上極めて珍重すべきものである。出現の時期は六月頃で、五月中旬より七月中旬に互つてゐる。その最盛期には盛にその聲を聞くことが出来るが採集することは相當に困難である。

尙英彦山にはこの蟬に關聯した興味深い傳説が口碑に残つてゐるので、次にその概略を記しておく。

本種は英彦山では「ジヨッキンゼミ」と呼ばれてゐる。この蟬の鳴聲の前奏音と、高調音とを「ジヨッキ

ン！ジヨッキン！シネ〜〜〜と聞いてその音を探つたのである。昔同山の山伏に淨欣坊といふものがあつて、或る時同山から有名な岳滅鬼峠を越えて日田の方へ布施を貰ひに出掛けた。行つたやがて深山にさし掛つた頃、突然後の方から「淨欣！淨欣！」と叫ぶものがあるので振り返つて「何ぢや！」と大喝した所が「死ね〜〜〜」と何處からとなく叫ぶので、急に恐れをなして「今日は日が悪い」とてヌゴ〜〜〜歸つたといふ。この話は高千穂男爵から伺つた所であるがそれを「昆蟲界誌」上に紹介したことがある（昭和八年 1933）。

勿論以前はこの「淨欣！死ね〜」の聲の主が何であるか、土地の人も知らなかつたのであつて、それがエゾハルゼミであることを最初に明かにされたのは實に吾が高千穂男爵であつた。それ以來土地の人はこの蟬のことを「ジヨッキンゼミ」と言ひ慣はしてゐるのである。

四、ヒメハルゼミ

ヒメハルゼミは日本内地産の蟬の中で最も特記すべきものの一つである。その内地に於ける最初の正確な記述は谷貞子氏の明治三十八年(1905)の圖説であつて、氏は産地として新潟、福岡及び千葉の三縣を挙げた。この時始めてこの和名が用ひられたのであるが學名は與へられなかつた。その翌年(明治三十九年 1906)松村松年博士は沖繩縣大東島産の本種を挙げ、之に *Leptopsaltria tuberosa* Signoret なる學名を採用しヒメハルゼミとし、本邦に於ける他の産地として本州及び九州を挙げた。これより先同博士は右の學名の蟬を既に明治三十一年(1898)に記録してゐるが、當時その標本はなかつた。氏のこの論文は W. L. Distant の大著 *A Monograph of Oriental Cicadidae*, 1889—1892 中の日本に産するものの部分を丸寫ししたるものを骨子とし爲に原著者の抗議を受けたと言は

れてゐるもので、この Distant の論者の中に右の學名の種が日本にも産することが記されてゐる。これはブリュッセル博物館に存する横濱産の標本に基くものである。元來この種は印度やマレイ群島に産するのである。それで右の標本が果して眞に右の種の標本であつたとすれば、その日本「横濱」といふ産地が誤であつたかも知れない。又日本産のヒメハルゼミを右の學名の種と混同したと考へることも Distant の研究ならば可能なことである。この著者の業蹟の甚だしく非科學的なことは普く人の知る所であり、現に右の大著に於ても日本産のヒグラシをタイワンヒグラシ *Pomponia fusca* Olivier と混同し同書の後の方で訂正してゐるのである。

その後大正六年(1917)に至り松村博士はヒメハルゼミを模式種として新屬 *Euterpnosia* を設け、且同種を *Euterpnosia chibensis* Matsumura なる新種となし、又沖繩縣大東島産のものは *daioensis* なる變種とした。この時に用ひられた材料は千葉縣八幡山産のものであつた。その後本種は更に本州では茨城縣片庭、静岡縣下田等、岐阜縣谷汲等、奈良縣奈良、兵庫縣淡路島、四國では高知縣幡多郡、九州では福岡縣以外に大分縣祖母山、宮崎縣霧島山、鹿兒島縣屋久島及び奄美大島、沖繩縣那覇等から知られるに至つた。

福岡縣下の記録は最初右に述べた谷貞子氏の記述にあるのであるが、その詳細なる産地は明かでない。この時の標本は長野菊次郎氏が採集されたものと想像される。その後縣下で知られた産地は筑前志賀島、同犬鳴山、豊前英彦山の三箇所であるが、聞き傳へる所によれば筑前若杉山にも産する由であるから、恐らく同山より三郡山、寶満山に至る連峯の諸處にも産するものではあるまいかと思ふ。

この蟬の特に注意すべき性質の二三を例舉すると次の如くである。

本種はその發生期が短く、土地によつて多少の違があるが、大體七月十日乃至十五日を中心とした短期間で、十日乃至二週間位の間である。その出現する場所も概して限られてゐて、ある局限された狭い區域にのみ出現することが少くない。茨城縣片庭や岐阜縣谷汲の如きはその好例であつて、福岡縣にあつても志賀島や英彦山の如きはその例に入るであらう。志賀島では未だ全島の觀察を行つてないが主に官幣小社志賀海神社叢(本調査報告第九輯所載、山崎又雄氏の報告「志賀島志賀海神社叢」を參照)内であつて、同地には南方の植物が特に豊富に見られる。英彦山では余は嘗て櫻馬場附近でその聲を聞いたことがあるが、昨昭和九年高千穂男爵の觀察された所によると、その出現の場所はその附近でも特に限られた小區域のみで、銅鳥居の附近のある森のみに發生するものであるといふ、之に反してある場所に於ては比較的廣範圍に互つて多數に發生することもあり、静岡縣下田や高知縣幡多郡の海岸の如きはその例であるが、余の觀察せる犬鳴山の場合もこれに當るものであらう。かゝる場合に全山その鳴聲に鳴響くの感がある。

この蟬はその體軀の細く小さき割合に甚だ大きな音を發するもので、茨城縣片庭ではその爲に之を「大蟬」と呼ぶ由である。又興味深きことはその發生地では屢々夜間燈火に飛來すること、これは高島春雄氏が静岡縣下田に於て觀察され、又高千穂宣麿男爵は英彦山に於ても屢々これを経験された由である。晝間は高き梢や繁つた樹叢内に棲息してゐるので採集は困難であるが、右の夜間の趨光性によつて容易に比較的多數の標本が得られる由である。

本種は元來熱帶性の昆蟲であつて、同屬のものは更に東洋熱帶に多く知られてゐる。本種の内

地に於ける分布を見ても、かくの如き系統の昆蟲なることを肯かしめるものがある。

更に本種に就いて一言附加すべきことは、本種が右に記した茨城縣片庭に於て古くより村民の愛護を受け、且現在天然紀念物に指定されてゐるといふことである。この片庭の「大蟬」に就いては、今日幾つかの詳しい報告が發表されてゐるので、ここには述べないが、その由來傳説については加藤正世氏の記事を御紹介しておく（『蟬の研究』p. 2—3, 1932）。

〔茨城縣笠間町から約六軒西方に片庭と云ふ處がある。此處に古來から有名な蟬の名所があつて、村の七不思議の一つとされてゐる。毎年七月頃になると、片庭の八幡社の小丘と、其處より稍南方一軒附近にある楞嚴寺リヤウオンの境内に非常に大きな聲で鳴く蟬があるので、村の人達は人間位の大きな蟬だと信じ、それに對して大蟬と云ふ名をつけ、恐れて附近に近寄る者も無かつた。その聲は非常に遠方まで達したと云ふことである。〕

〔最近私「加藤正世氏」は此の蟬がヒメハルゼミ *Euterpnosia chibensis* Mats. であることを確かめ、協力して調査された堀江廣と共著で研究を發表した「加藤正世、堀江廣、村民舉つて愛護する珍らしい蟬に就て」昆蟲世界 vol. 34, p. 363—379, pl. 6, 1930〕その後蟬の衰亡しつつあるのを保護し、村の名物を愛護する目的を以て、大蟬保護同志會が組織され、村民が舉つて保護をすることになつたが、近く天然記念物として指定され、國家によつて保護される事になる相である。

この蟬に就いて次の様な傳説がある。

「昔八幡社の下に金持の酒造家があつた。金持の常として至つて吝嗇で、殊にその家の老婆は金の爲ならば人を苦しめても何とも思はない質であつた。或る夏の夕方、一人の老僧が托鉢に來

て一食を乞ふのであつた。老婆が出て來て見ると、破れ衣に破れ笠、身は垢で埋まり、二た目と見られぬ風體に老婆は「お前の様な乞食坊主はいいつて來てはいけないよ、お前なんかにやる様な物があれば私が食べるのだ。早く歸んなさい、お前なんかは水でも飲んで念佛でも唱へてゐたらいい。」すると坊さんは「宜しい、お前の家は裕福なのに我に一食を惜みその様な惡口雜言を吐くならば考へがある。お前は今私に水を飲んで念佛を唱へると云つたな。不如汝成蟬飲水喝！」と大聲で唱へつゝ境内の一老樵を指すと見れば、今迄其處に居た老婆の姿が忽然と消えて老樹に數千の蟬が生じた。此の老僧は當時徳藏寺に足を留めて居た弘法大師の巡錫姿であつたと云ふ。

「八幡社には昔笠間藩主が毎年蟬聽きに來たと云ふ事である。近年再び有名になるや、發生期には非常に多數の人が鳴き聲を聽きに來る様になつた。それが爲に聽聲所を設備してある程である。」

五、總

括

福岡縣下には現在十一種の蟬の産することが知られてゐて、その中には學術上珍らしきもの（キウシウエゾゼミ）分布上注目すべきもの（エゾゼミ、エゾハルゼミ、ヒメハルゼミ）があり、又民俗的に興味深い傳説を伴つたもの（エゾハルゼミ）さへ知られてゐる。之等は孰れも貴重なる資料であるが現在はその産地や出現時期が限られてゐて、且採集等は困難であるから、これに對して特別の保護を加へる必要は認めない、然し之等に對しては十分の注意を拂ひ、將來濫獲されたり、或は衰退する様なことがあつたら、直ちにその原因を確め、之を防ぐ處置を採るべきものである。

船
小
屋
の
螢



第一圖 船小屋橋をその上流より臨む、左側は中之島



第二圖 船小屋橋をその下流より臨む、右側は中之島



第三圖 下流より中之島（中央の森）を遠望す



第四圖 中之島の樟林散索地の設備を示す

船小屋の螢

調査委員 江崎 悌三

一、緒言

船小屋は古名を東古賀原と稱し、福岡縣八女郡古川村及び水田村の兩村に跨つてゐる幽郷であり、南側は矢部川に臨み、これを隔てて山門郡東山村に對してゐる。古くより含鐵炭酸泉の湧出を以て知られ、縣下に於ける最も著名なる湯治場の一に數へられてゐる。九州本線船小屋驛の東方一軒餘に位置し、自動車の連絡があるので、交通は頗る便利である。この附近には景勝の地や、名産の珍重すべきものが多く、「船小屋八景」として

長堤曉雪 巨泉晚鐘 陽暉春靄 飛形秋月
珠瀨螢火 駛川香魚 津島鐵橋 朝鮮松原

が擧げられてゐる。右の中に「珠瀨螢火」として數へられてゐるごとく、この地の螢の景觀は古來著名なもので、而も今日尙その盛觀を謳はれてゐる。「珠ヶ瀨」とは矢部川の一部で、船小屋から溯つて、古川村溝口の南筑橋に至る間の通稱である。この地の螢は古くより多くの詩歌に詠まれてゐる。ここにその二三を摘記して見よう。（船小屋の榮、詩歌〔明治二十八年より採る〕）

中 村 芙 洲

晚涼冷冷迫吟衣 騷客逍遙去浴沂 白玉瀨頭連白玉 滿川風露夜螢飛

武 藤 直 治

珠瀨呼來名亦宜 滿川風色夜殊奇 萬殊誰向蒲間擲 無數飛螢落水時

角 省 吾

矢部川やたませの水の碎ちる光は夜半のほたるなりけり

土 方 か い 子

玉かせの水に光の照りそひて闇もなみまにほたる飛かふ

船 曳 鐵 門

矢部川や名に負へる瀨の夜光たまは螢のすたくなりけり

余は船小屋に於ける螢の景觀の現況を知らんとして昭和九年六月二日現地を視察した。次はその大要を報告するものである。

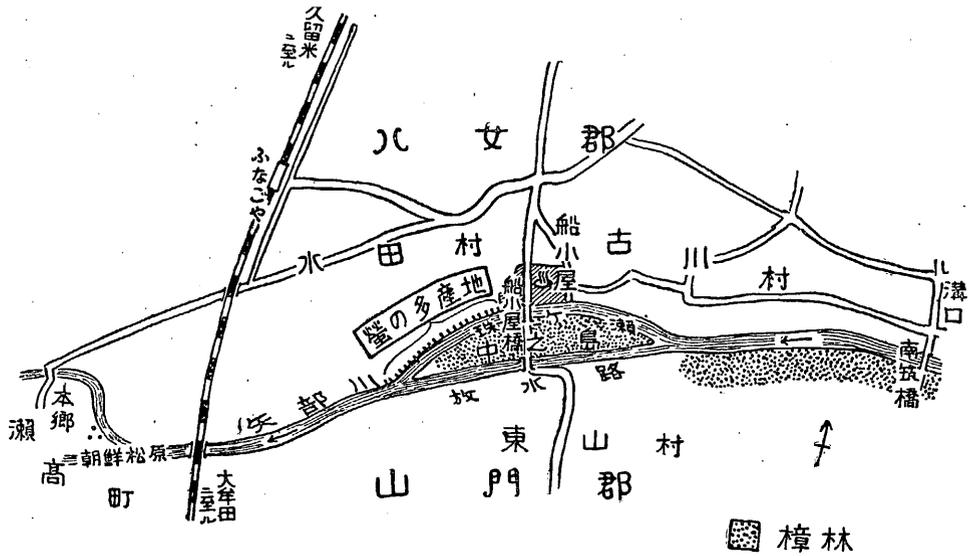
二、船小屋の螢棲息地の現状

船小屋に於けるホタルは本邦他地方の螢名所に於けると同様ゲンジボタル *Luciola cruciata* Motschulsky であり、少しく時期遅ればヘイケボタル *Luciola lateralis* Motschulsky も出現するものの如くであるが、その偉觀は勿論前者によるものである。出現の時期は年によつて多少の變化があるが、五月下旬より六月上旬に互つてその最盛期を見るのは北九州の各地に於けると同様である。

ゲンジボタルは本邦各地に最も普通なる昆蟲の一種で、縣下に於いても至る所に産し、又この矢部川の沿岸にも廣く出現するものであるが、特に上述珠ヶ瀬附近に多く發生する。船小屋鑛泉の對岸は有名なる矢部川樟林の一部に當り、鬱蒼たる樟の巨木繁茂し、偉大なる景觀を出現してゐる。この樟林の詳細に關しては、本調査報告第九輯昭和九年所載、木下盛枝、矢部川の樟林なる報告を參照せられたし。現在この船小屋の前を流るる矢部川は、その上流約五〇〇米の地點より直線の放水路によつて下流約一軒の地點に結ばれ、從つて船小屋の對岸は切斷されて「中之島」を形成してゐる。右の樟林の下部は竹の密林によつて被はれてゐるのであるが、この中之島の部分には近年之を開拓して、通路、廣場を設け、見事なる散策地となり、更に公園としての諸設備も完成されようとしてゐる。この林相の美觀は誠に類罕なるものである（本文附圖、尙上述木下盛枝氏論文附圖參照）。

船小屋の螢の特に多く出現するのは、この矢部川珠ヶ瀬の中でも、船小屋橋の下流で、右に記した鬱蒼たる樟林を背景とした區域であるが、更にその上流及び下流地方にも見られる。川に舟を浮べて或は下り或は上つて之を賞することが出来る。この樟林の西端に近い所では船小屋鑛泉地の照明も達せず、清澄なる水、幽邃なる森に群る無數の螢群の美觀は眞に筆紙に盡し難いものがある。之は川の右岸からも賞美することが出来る。この船小屋の螢の特筆すべき點は、その四圍の結構の雄大なる點にあるもので、又螢群の豊富なことも他に較べ得る所は尠い。宏大なる背景の前に何千何萬の螢が獨特な律動的な點滅を行ひつゝ、飛び交ふ景觀は實に見事である。

更にこの樟林より下流に下れば川の兩岸は開けて坦々たる原野となり、右の如き幽幻の境を



船小屋附近の略圖

脱する。然し尙九州本線の鐵橋より更に山門郡瀬高町の朝鮮松原に至るまで、尙螢の數は少くない。鑛泉地より更に川の右岸に沿ひて長堤續き、これに現在は櫻の並木が栽植されて、春の爛漫を競ふのであるが、樹齡未だ若く、夏日の散索には尙物足らぬ憾がある。

之を要するに船小屋の螢は、船小屋鑛泉地及びその下流約一籽の間に於て、その偉大なる背景の下に群飛して、他に見ざる華麗なる景觀を現出してゐるものと言ふことが出来る。

三、船小屋の螢棲息地に對する保護策

元來ゲンジボタルの如く本邦至る所極めて普通なる動物は、單にこれが多産するの故を以て保護をする必要はない。殊に天然紀念物として取扱ふには餘程慎重なる態度を要するものである。此の如き動物を天然紀念物に指定する場合は、史蹟名勝天然紀念物保存要目「天然紀念物、其ノ一、動物ニ關スモノ」中の第五項に該當するもので、従つてこの場合には

その動物とその環境とは離して考へることの出来ないものである。

今船小屋の螢の現状を見るに、その蕃殖條件良好にして、又その環境に於ても樟林は國有林として、又將來天然紀念物として十分の保護を享け得るものであり、又矢部川の一部なる珠ヶ瀬は放水路の完成により氾濫を避け得る施設が完備してゐる。當面の問題は遊覽客の捕獲を防止することであるが、これも地元の協力宣傳と縣の指令とにより殆ど完全に勵行されてゐる。

かく見る時は船小屋の螢は現在の程度の施設に放置するも、敢て近き將來に危険に直面するとは考へられない。然し若しその環境に人爲的變化の加へられることがあれば、忽ちその發生に障害を起す虞がある。よつてこの點によく留意して之を未然に防ぐの道を講ずべきのみでなく、更に地元にて積極的に保護を加ふることも望ましい。ゲンジボタルの發育にとつて最も忌むべきことは川の水の清澄さを失ふことである。従つて將來矢部川の上流に汚水を排出する如き工場等の建設されることがあれば、最も恐るべきことで、これは單に螢の爲のみならず、同地方の名産として知らるる香魚アユの保護の上からも注意しなければならぬ。右の矢部川には螢の幼蟲の食餌たるべき螺類は極めて豊富に産するのである。而して右の危険を未然に防止せんには、單に現状の施設を存續するのみでは不十分であつて、更に一層徹底した保護の道を講ずべきもので、これには船小屋乃至更に廣範圍の矢部川の螢を天然紀念物に指定するのが適當なる方法である。かくして直接螢自身及びその發生地の保護の完全を期することが出来る。同時に必要なる場合には史蹟名勝天然紀念物保存法、第四條第一項並びに史蹟名勝天然紀念物保存法施行規則、第二條を適用して、その上流地方に於ける有害なる工場等の設立を禁止し得ることにな

るのである。

從來ゲンジボタルの發生地にして天然紀念物に指定されたのは、古來近江守山螢の產地として知られた滋賀縣野洲郡守山町及び栗太郡物部村の二郡二箇町村に互る區域と山梨縣中巨摩郡西條村の鎌田川螢發生地の二箇所あるのみである。而して吾が船小屋に於けるゲンジボタル發生地は同じく古來その名を謳はれたる所であり、又その四圍の風物の特異性と、多産することによつて、既に述べたる如く、他地方の發生地に見ることの出來ぬ長所を具備するもの故、之を守山螢や鎌田川螢の例に倣つて天然紀念物に指定することは最も適當な處置であると信じる。

又地元に於ては將來一層その保護の實を擧げ、又觀賞の施設を完備することに努め、以て天然紀念物としての存在價值を高めることに盡す必要があるのは申すまでもない。その具體的方法は多々あらうが、先づ當面の急務は一層注意して遊覽客の自覺を喚起せしめ、以てその捕獲の嚴重なる取締をなすことである。又矢部川右岸の堤防には現在櫻の並木が栽植されてゐるが、更にその川岸に近き部分に柳を植ゑて、螢の發生時期にもこの堤防に景趣を加へること等も一つの方法であらうと思ふ。

昭和十年三月廿九日印刷
昭和十年三月卅一日發行

福 岡 縣

福岡市渡邊通四丁目

印刷人 間 藤 次 郎

福岡市渡邊通四丁目

印刷所 秀 巧 社 印刷所

電話 六一八八〇九三八番
振替福岡一五七九〇番